『篁物語』承空本（「小野篁集」）に関する研究課題

安部清哉

論文要旨

本稿では、近年『冷泉家時雨亭叢書』として写真版で公刊された、『篁物語』の写本である承空本（「小野篁集」）を取り上げ、①出来る限り詳しい翻刻の提示、②書陵部本及び彰考館本甲本・同乙本との新たな四本対校表、並びに、関連データの提示、③それらを踏まえての『篁物語』の諸本研究における位置付けに関する検討、を行うことを目的とする。承空本は、最新の研究では、書陵部本の「親本」あるいは「書写本」と解釈されてきており、鎌倉初期の写本である点からも、諸本中最も古態を持つ可能性が出てきている。書陵部本との比較により、書写関係が検討されてきた問題箇所は、短編ということもあって、書込みや誤写などの細部に及んでいる。一方、近時、平林文雄二〇〇七・四にて承空本を含めた新たな四本対校表が公表されたものの、翻刻上、正確さという点と、書写状態の細部の情報という点で課題を残すかたちとなっている。本稿では、最新翻刻に課題があることに鑑み、承空本の性格とその諸本における位置付けをより明らかにしていくためには、まずは上記①②の資料の共有が必要と考え、それらを提示することに主眼を置きつつ、その作成過程で明らかにした2，3の異同箇所について検討を加えた。その結果、承空本は、書陵部本と極めて類似し、直接の書写関係（底本）にある蓋然性が極めて高いものの、一方でなお検討すべき特徴も見られるものであった。今後は、「傍書・見せ消ち・重ね書き・空白・虫損」までも対象とした分析を行い、四本の比較によって祖本の形態の検討をしていく必要がある。

キーワード【親本、翻刻、四本対校本、書陵部本、彰考館本】

一　はじめに――新展開二題

『篁物語』の研究は、この十数年程の間に、二つの面で新たな展開を見せている。一つは、成立年代に関してであり、いま一つは、伝本研究に関して、である。

本稿では、特に、この後者の点について、基礎的資料を提示して、それに関するいくつかのあらたな解釈を提示しておこうとするものである。まず、この二点について、簡単に確認しておきたい。

成立年代については、新たな解釈（安部清哉一九九六）が提示され、従来、平安初期から鎌倉初期までさまざまに設定されていた解釈に、一定の方向性が与えられた。その九〇〇年代後期（第二部は後代の補記ありとする）という解釈は、その後十年の期間をおいた最新の辞書における『篁物語』の「成立」解説においても、現時点における成立年代の有力解釈として、引用されるに至っている（二〇〇七年刊行、明治書院『日本語学研究事典』「篁物語」阿部好臣氏執筆）。またこの間、日本語学では、形容詞・形容動詞の語彙量の史的変遷を明らかにした村田菜穂子二〇〇〇によって、安部一九九六の解釈を支持するデータも提示され、作品年代の解釈の妥当性が補強されてきている。

さらに、二〇〇八年には文学研究の側からも興味深い解釈が提示されるようになった。井野葉子二〇〇八は、篁物語の『源氏物語』「浮舟物語」との著しい類似を指摘し、『源氏』浮舟物語の構想の下敷きになっている蓋然性が高いという新解釈を提示した。その様々な類似点の指摘とその解釈は極めて注目される妥当なものと本稿執筆者には受け取られたが、仮に、その説（井野「源氏浮舟の篁物語引用」説）が妥当であれば、『源氏物語』に先行する年代であることが、文学研究の側からも支持される段階に至ったことになる（井野の着眼は口頭発表では既にその一〇年前に溯る）。

二つ目の伝本に関する研究としては、二〇〇二年（平成十四年）に、新資料として「小野篁集」という表題のある承空本が公開されるという新展開が挙げられる。この承空本について、現存諸本の「親本」にあたるという解釈（久保木哲夫二〇〇二「解題」）が提出されて、伝本研究に新たな進展が生まれるに至った。

この久保木説は、その後、上記『日本語学研究事典』中の「篁物語」において阿部好臣氏によって支持され、現存諸本中最も古体とされていた宮内庁書陵部本は、「その書写本と考えられる」（傍線引用者）という、一歩踏み込んだ解釈へと展開するに至っている。

さらに、久保木説には、別の支持説が現れ、近年、「対校本」を提示した平林二〇〇七において、「承空本は親本、書陵部本は子本である。」（冒頭）、「承空本が親本である。」（末尾、相違箇所提示部分）というように、「親本―子本」関係として支持されるに至っている。

「親本」という位置づけ（久保木・平林）と、「書写本」という解

釈（阿部好臣）には、後述するように、多少相違が存すると思われるが、その相違点も含め、諸本比較は、ここに至って、より精密な検証が必要な段階に入ったということができよう。

二　諸本研究の新課題

ところで、後者の新資料である承空本の位置付けに関わって、以下のようないくつかの課題があることを指摘しなければならない。

①久保木氏の解釈は、短い「解題」の紙幅の中で、ごく一部の根拠の例示によって提示されているもので、その解釈の根拠の全貌が、いまだ明示されているものではない（二〇〇七年度以前を対象としての管見の検索範囲）。

②久保木氏による承空本の翻刻や校異はまだ提示されてはいないようであり、よって、その「親本」解釈の基礎的根拠となる、ご自身による承空本の読み取りも未詳の状態にある。（後述の平林氏二〇〇七にても、先行する承空本に関する論考は他に取り上げられていない。また、平林氏ご自身が、承空本との対校本を提示しているところから見ても、承空本に関する翻刻は、現時点では、平林氏のものだけであると思われる。）

③阿部好臣氏は、書陵部本が承空本の「書写本」という解釈を提示している。しかし、「書写本」であるという根拠は、辞書項目ということもあって、明示されてはいない。この「書写本」の表す意味は、「親本」という解釈とはやや異なるものであると受け取れるもので、それはつまり「直接的書写関係」を意味することになるから、久保木説（平林説）とは異なる、より直接的筆写関係を示すことになる。

なお、補足しておけば、久保木氏の「親本」というその「親」という意味は、執筆者が理解する限りでの、一般的文献学的研究では、直接依拠した本（底本）という場合のほかに、書承関係における上位位置にある本という程度の緩い関係までも含める表現と思われる。それは、つまり、次のような複数の場合を含むものと解釈される。[1]

ア　依拠した本。底本。（書写においては直接的に見た本）

イ　必ずしも「親子」関係に限らず、祖母―孫関係やそれ以上はなれた直系の上下関係も含む。（直接実見しながらの引き写しを必ずしも意味しない。）

ウ　さらに、傍系的上位世代と下位世代という関係までを緩く含む場合もある。

それに対して、「書写本」とは直接的書写関係に使用するものと思われるから、右の範疇としての「親本―子本」とは全く異なり、近い関係の証明以上に、何らかのより直接的書写の徴証を伴う必要が出てくると理解される。[2]

④平林氏の論考においても、「親本」と解釈された論拠を明示し、論証しているものでは必ずしもない。平林二〇〇七は、承空本

を含む三本の校異対照本文を提示された。そこでは、書陵部本の本文を中央に示し、承空本・彰考館甲本との校異箇所のみを、それぞれ左右に提示している（承空本のカタカナによる表記という点での相違は捨象されている）。そこでは、校異を示すことに主眼が置かれていて、「親本」と表現された箇所では、（書陵部本と）「対校した所、その本文は九九％共通しており、承空本が親本、書陵部本が子本である。」とあるのみで、共通していないとされた「一％」をどのように解釈された結果かは、不明のままである。また、「親本」の表現は、対校表の後の「書陵部本と承空本の平仮名と片仮名の相違箇所」と題した末尾にも「④ケアレスミスと思われるものが二三あるが、承空本が親本である。」というかたちで、再度見られるのであるが、「相違箇所」からどのように判断された結果であるかは不明である。相違箇所の四点としては、「一【引用注：ここに①があるべきか】、んをムと表記している箇所〈略〉①書陵部本（以下略）」「②むをンと表記している箇所」「③その他の平仮名と片仮名の相違箇所」も挙がっているが、それらを踏まえて見ても同様である。

⑤平林二〇〇七の「対校本」は、現時点では承空本の本文の翻刻（解釈）を最初に提示されたものであり、その点で貴重なご研究である。しかし、それは、書陵部本の平仮名本文を提示して、それと相違する箇所「のみ」を併記するという方法によっている。そのこともあり、また、翻刻上の解釈の問題そのものもあって（本稿で具体的に問題点を提示していくように）、承空本の翻刻として検討した時に、なお次のような課題が残されていることを指摘しなければならない。（また、文字資料として見た場合には、承空本における、文学作品の全文「カタカナ書き」という、日本語史の文字研究資料としても特徴的で貴重な形式が再現されていないという課題もある。）

ア　三本の中心に全文提示された底文である「書陵部本」自体の間違い（ご自身の以前の翻刻と比較しても単純誤植と言えるものも含まれる）

イ　それに伴って（アの書陵部本に合わせて校異を示しているために）、承空本本文が正確に翻刻されていないことになる箇所が生じている

ウ　承空本の翻刻にあたって、解釈が相違してくる箇所が存在する（別の読み取りが可能な箇所）

エ　承空本における「見せ消ち・虫損・傍書・挿入・空白」などの箇所が、十分に注記ないし再現されていない。そのため、諸本との比較の上で必要となるやもしれない情報が、まだ十全には提示されていない。これらの諸点は、承空本の写真版が公開されているので、通常は不要のように思われるものであるが、①久保木氏説の解釈の根拠に「虫損」箇所が取り上げられていること、一方で、②平林氏翻刻では、

これらの箇所についてはほとんど注記もないこと、などがあるので、これらの箇所の認定や解釈が、諸本関係の位置付けに関わってくる問題となり、看過できないことになる。

⑥承空本の位置付けには、「虫損」部分や誤写部分（見せ消ち・挿入・傍書も含めて）にまで及んだ翻刻、及び、その箇所での諸本との比較が重要になってきている。なぜなら、久保木氏説では、その「虫損」部分や誤写部分での比較を、代表的事例箇所（それぞれ一箇所を提示）として取り上げているからである。それは、諸本本文がほとんど同文であり、かつ、短編であることもあって、通常のような本文部分の異同だけでの比較よりも、より細部での比較が必要になっているためでもあろう。そのような細部の検討のためには、本文の状況を、それらの箇所にまで及んで、可能な限り確認し、かつ、その判断を共有できる状況にしておくことが、研究上有効であることになる。しかし、⑤のエにも触れたように、平林氏翻刻本は、（通常はその多くを省略してしまう、そのような細部を提示することまでを目的にしていないので）、その点についての情報を提示する形式にはなっていない。要するに、現時点での篁物語研究において、承空本を検討していくためには、その翻刻のより正確な提示と検証がまずは必要になってきていることになる（それらの箇所については、本稿の翻刻で具体的に明らかにしていく）。

以上のように、新資料の研究の進展に伴って、①～⑥の課題があることが明らかになってきた。それらから見て、伝本研究における承空本の位置付けを検討するためには、文学研究資料としてはもちろん、日本語史資料としても利用できることを視野に入れて新たな承空本の翻刻を行い、可能な限り細かな新編の校異表を作成しておくことが必要になる。また、諸本の比較研究のためには、研究者の共通基盤としてそれらを公開していくことが有効であり、優先されると言えよう。

そこで、本稿においては、承空本の翻刻を提示することをまず中心にしつつ、関連する諸資料（四章参照）を提示することを、第一の目的とする。あわせて、（紙幅の関係もあるので一部に限定するが）久保木氏が「親本―子本」の根拠として提示された二箇所を含めた重要校異箇所をいくつか提示して、特に、宮内庁書陵部本と承空本とを比較検討してみることにしたい。

なお、小稿をなすまでに、関連文献――承空本公刊と久保木説の後の、篁物語研究や承空本研究、および、久保木氏、阿部氏、平林氏の論考――を可能な限り探索したが、管見の及ぶ限りでは、見出すことができなかった。見落としがあればご教示いただければ幸いである。

三　「親本」説の検討

三―（一）　久保木説の論拠

ここでは、久保木二〇〇二での「親本」説を確認しておきたい。久保木氏の「解題」の後半がその論拠も示した解説箇所である。やや長くなるが、以下にそのまま引用してみたい（傍線引用者）。

「従来知られていた伝本としては、彰考館蔵の二本（うち一本は戦災で焼失、ただしその影写本は残っている）と宮内庁書陵部蔵の一本のみ。彰考館蔵の二本はいずれも書名を「篁物語」とし、現存する一本は枡形本で、焼失した一本は美濃判の袋綴本である。本文の上では互いに密接な関係を有する。また書陵部蔵の一本（五〇一・一七九）は、「小野篁集」という霊元天皇宸筆の外題を持ち、枡形本で、本文は原則としてひらがな書き。書写様式は異なるが、内容的にはこの承空本を親本としていることは明らかで、一、二の不注意による誤写と思われる箇所を除いて、本文はまったく同じである。たとえば承空本六ウ一行目、

ナニカメニ□カラサン人ヲ

の空白の箇所は、承空本では虫損のため判読しにくいところであるが、書陵部本では意図的に空白にして、わざわざ小さく「虫損」と傍らに注記しているほどである。書写の上で親子関係にあることは明白である。一方誤写かと思われる箇所は、承空本七ウ六行目、

コノセウトモイトヲシトミテ

が、書陵部本では、

このせうともいとをしとをしみて

となっているようなところである。「イトヲシトミテ」が、「いとをしとみて」となるような類は、明らかにケアレス・ミスとみてよいだろう。なお同じ書陵部蔵で、同装同型の『山田集』が、後に述べるように同じく承空本の写しであることを思うと、該本の場合も、確認できる奥書類こそないが、右の推定はまず間違いないものと考えられる。従来知られている伝本のすべてが近世の写であるから、鎌倉期の写本の出現は、当然ながら非常に大きな意味を持つものになる。」

「親本」とした論拠と論点は、およそ次の四点にまとめられる。

ア　承空本の「虫損」箇所がそのまま書陵部本でも、「虫損」として書写されている（一箇所）。

イ　書陵部本の「ケアレス・ミス」と見なせる異同箇所で、承空本⇓書陵部本と見なす方が、その逆と見るよりは文意が取りやすい箇所がある（一箇所）。

ウ　書陵部本は「小野篁集」という承空本と同じ外題をもつ枡形本であるが、その書陵部本と同装同型の「山田集」が、やはり

承空本の書写本と考えられ、成立に共通点が認められる。書陵部本の「小野篁集」と「山田集」は、共に承空本が書写され、同様の装丁にされたものと見られる。

エ　（アイの点を支える傍証として）鎌倉期の書写になるものであるから、現存諸本よりもより古い形態を留めている可能性がより高い。

オ　一、二の不注意による誤写と思われる箇所を除いて、本文はまったく同じである。

これらのうち、作品本文部分に関するアの点は、久保木氏の解釈が適切なものとして首肯される。特に、アの「虫損」箇所は、直接的「書写」とも見なしやすい。一方、慎重に解釈すれば、承空本を書写した別の本でも同じく「虫損」と記載されて受け継がれ、そのような子本系統を、書陵部本が書写したという可能性をも視野に入れておく必要があろう。

一方、イの単純誤写と見なせる箇所は、どのような本からの書写でも起こりうることなので、直接の書写関係の証拠とはならないであろう。（イを、氏の前後の文脈から、論拠として提示した箇所と見て右に挙げたが、久保木氏も「ケアレス・ミス」の箇所として挙げているだけなのかもしれない。書写関係の判断とは無関係であれば、本文に関する具体的な指摘箇所は「虫損」一箇所ということになる。むしろ、ウの解釈の比重が大きいということか。）

次節では、その他の二、三の点について取り上げ、ア・イの二点と併せて総合的に検討してみることにする。

三―（二）　異同本文の一解釈

承空本の異同箇所について、少し検討しておきたい。本稿では、翻刻と校異を挙げることを優先するので、紙幅の都合もあり、数箇所にとどめる。

（一）承空本が親本と考えられる（久保木説を支持できる）箇所

書陵部本に「不審」という注記のある次の箇所がある。承空本―書陵部本という同系統の関係を示すという点で、久保木説を裏付ける箇所である。さらに、「虫損」は別の本でも、「虫損」とあったものを引き継いだ可能性があると言えるものであるが（承空本→（別本「虫損」）→書陵部本）、この箇所は、文字そのものの判読に関わるので、「虫損」注記よりも、より直接的な関係を示す箇所と判断できそうである。次のように、文字の判読で「不審」という注記がある。

○承空本P九五（七オ）一――「オモクアナ（この「ナ」は「ル」ミセケチで右に「ナ」）ヤトイヒケレハスコシ心」

書陵部本――「おもくの【小文字で「不審」とある】なや」（『重くのなや』と言ひければ少し心」）

この箇所の、傍線を付した「ア」は、「テ」の一画目がないような字体で、「ア」と読むにはやや躊躇され、「マ」「テ」なども検討したくなる文字である。仮に書陵部本が、承空本を書写したとした場合、書陵部本は（「ノ」とは読みにくい字であるが）、おそらく文脈から「ノ」と読み解きつつも（書陵部本「の」）、その字体が判読しがたいことから「不審」と書き留めたと解釈される。承空本のように判読に疑問が出る文字表記になっている写本でなければ、この「不審」注記は残らないから、書写過程で継承されうる「虫損」注記に比べて、個々の写本の表記と直接関係する可能性がより高い箇所と解釈されよう（もちろん、「不審」の仮名字体そのものを「臨模」することも皆無ではなかろうが）。

しかし一方で、承空本が、「ノ」の片仮名の書き損じなら、既に上部に横棒を一度書いてしまっていることになるので、別に改めて「ノ」と傍書しないと確実には「ノ」には読み取れそうもない字体である。「ノ」とは書き直していないところを見ると、やはり「ア」の可能性が高く（平林氏も「ア」と読む）、その点を考慮して、次の見せ消ちの「ル」と続けると、「オモクアルヤ」だったものを、後に「ル」の箇所を「ナ」と改めたとも取れなくもない。そして「オモクアナヤ」は意味不通であるから、あるいは、「ナ」の修正は、本来は「オモクナルヤ」と「ア」の方を修正するつもりが誤ったということもあるかもしれない。

この「おもくのなや」は、彰考館本（甲乙同文）では「おもひくさなや（思ひ草無や）」とあって、解釈上問題となってきたところでもあった。

そのように、単純に一つの解釈のみを採用できないところがあるが、ともあれ、書陵部本が承空本を書写したとすれば、文意的にもこの「不審」の注記は理解しやすいところでもである。また直接的関係をも示唆する。

（一）で見た久保木氏のアの箇所も「虫損」とあり、この「不審」も注記があり（偶然かもしれないが）、承空本の状態の曖昧箇所と書陵部本の注記箇所との関連を強く示し、両書の近さをより強く示唆している。

（二）どちらとも言えない箇所

○承空本P一〇一（一〇オ）一六――オヤイ（「ヤ」と「イ」の間の右行間に「ヲ」あり）トヨクハラヒテハナカウタキ

書陵部本――「やをいとよくはらいて」（屋をいとよく祓いて）

下線部の「オ」は承空本以外にはない。承空本をそのまま書写すると、「親（を）、いと良く祓いて、花・香焚き」となる。現在の解釈では、「屋を、いと良く祓いて」であり、「親」では文意不通となる。

書陵部本が、承空本ないし承空本のような本文をもつ写本を書写したとすると、必ずしも忠実には写さず、「本文の解釈を加えた」上で、「オ」を衍字と見なし、除外するという処置を加えているこ

とになる。あるいは、先の「虫損」「不審」箇所のように、注意しながら忠実に書写する姿勢であったならば、「オヤヲ」と書写するか、そこに何らかの注記があってもおかしくないところかもしれない。

ところで、承空本では、「やをいとよく」だったものを、少し前に「おや（親）」が出てくるために、「ヤヲ」を誤り、一度「オヤ」と書いた後に誤りに気付いて「ヲ」を傍書したものの、「オ」を消し忘れた、ということであるなら、この承空本での誤写は理解しやすい。

（三）承空本を直接書写したとは認めにくい箇所

① 承空本P八四（七オ）一　――「フミノテウ（「ウ」の上に「フ」となぞったか）【右行間に「本ニカク」とある】」

書陵部本――「ふみのちり本ニカク」【「り」の字母は「利」】

「本ニカク」の注記は諸本で共通する。問題はその直前の字体であるが、承空本は「ウ」と書いて「フ」となぞったようにも、「フ」を「ウ」となぞったようにも見える状態である。「本」のまま書写しても、とても書陵部本のように「り」（利）には読み取れない字体である。反対に、「り」の平仮名であれば、「う」と見てとる可能性は、高い。直前の「チ」と「テ」、「ち」と「て」も誤写し得る字体である。その点から見ると、この箇所は書陵部本が直接承空本を見たとするには、やや躊躇される箇所と言える。

ただ、書陵部本が書写したのが、直接は承空本ではなく、承空本に類似した別の本文であり、その「り」（ないし「ちり」）と読めるところを、語意未詳ながら「本」のままに書写したという可能性はなお残る。

また補足すれば、この箇所も解釈上問題にされてきたところである。承空本でなぞったようなこの自体も、前述の注記、傍書などの箇所なども、承空本の鎌倉段階で、文意が取れない状態が既に諸本に共通してあって、そのような箇所が、承空本には、比較的忠実に反映している様子がうかがえる。

② 承空本P一〇二（一〇ウ）一五（虫損であるが、「イ」と読める。平林氏も「イ」）

リテミタマヒウケタマハリヌイ|マ
イヱニマカリテ御返キコエントノ給
（りて、見給ひ承りぬ。今、家に罷りて～）

書陵部本では、傍線部分は「あ」で、彰考館甲本・乙本は「い」である。書陵部本がもし承空本を書写したものであれば、虫損で判読しにくかったため、「ア」としたと推定される。しかし、書陵部本が、もし承空本を見た場合、その段階での承空本の虫損がどの程度進んでいたかにもよるが、少なくとも、現在、平林氏翻刻で「イ」と判断できる以上には、「イ」と読み得たのではないか。少なくとも、（二）のように「本文を解釈している」ことも考慮すればなおさら）、「虫損」とは言え、文意が取れなくなる「ア」とは取りにくい箇所かと思われる。

三―（三）比較結果（中間報告として）

（二）で検討した点を総合すると、次のことが指摘できる。

ア　承空本が書陵部本よりも上位の系統と思われる箇所は、久保木説の指摘箇所のほかにもまだ指摘できる。

イ　直接、承空本を書陵部本が書写したと見るには、疑問の箇所があり、なお検討を要する。

ウ　書陵部本が書写した本として、承空本に類似するが承空本とは異なる筆記状態の本（承空本系別本）の存在した可能性も指摘できる。［（二）の（三）］

四　承空本翻刻・校異・漢字資料

上記のような課題と考察とに鑑みて、改めて承空本の詳しい翻刻と校異表の提示が、今後の諸本研究にとっても有効と考えられる。そこで、本稿では、承空本の翻刻を中心に、それに関する次の資料を提示する。[3]

（1）表一　承空本『小野篁集』翻刻（安部作成）

（2）表二　『篁物語』承空本対校四本校異一覧（安部・徳田結子作成）【補注】

（3）表三　平林二〇〇七対校本本文部分（書陵部本）の誤植箇所（そのために承空本が正確に示されていない箇所）（徳田・安部作成）

（4）表四　承空本の平林氏翻刻との相違一覧（安部・徳田作成）

（5）表五　承空本の傍書・見せ消ち・重ね書き・空白・虫損などの箇所（安部作成）

（6）表六　承空本『篁物語』漢字表記索引（徳田作成）

（7）表七　承空本『篁物語』漢字表記率（徳田作成）

表一は、承空本全文翻刻であり、「見せ消ち・虫損・傍書・挿入・空白」を可能な限り注記した（割愛した箇所も残った）。日本語学の立場からは、鎌倉期の文学作品の「カタカナ書き」資料としての重要性も考慮して、原文カタカナを生かして翻刻した。

表二は、それを踏まえて、四本の異同箇所を一覧にして示した（先行研究を参考にし、特に、平林二〇〇一の恩恵にあずかり、必要に応じて諸本の写真版・影印本にも戻って確認した）。カタカナか平仮名かの相違は捨象した。

表三・表四・表五は、表一・表二の作成過程で明らかになった翻刻上の課題箇所を提示した。表四は、あくまで表一の安部翻刻における安部の解釈との相違箇所ということでしかない。その適否については、諸賢の忌憚なきご教授を望むものである。

表五では、承空本の「傍書・見せ消ち・重ね書き・空白・虫損など」の箇所を提示した。通常はこのような細部は、諸本比較や解釈に関

わらない限り、省略される箇所である。しかし、久保木二〇〇二でも「傍書」箇所が取り上げられていた。本稿での検討でも、「重ね書き」部分を問題とした。そのように、『篁物語』（小野篁集）が短編で大きな相違も少ないこともあって、「傍書・見せ消ち・重ね書き・空白・虫損など」における問題も検討する必要が生じてきている。そのような事情に鑑み、それらの一覧も提示しておくことにした。

表六・表七は、日本語学における特に文字史研究の視点から、鎌倉期の仮名書き散文資料における「常用的漢字表記語彙」を検討するための資料として作成した。表六では、漢字書きされた語彙の一覧として索引を提示した。表七では、それが当該語総用例数（カナ書き例数＋漢字書き例数）に占める割合を示した。これによって、鎌倉期における「常用的漢字語彙」の一実態を知ることができる。

五　日本語史漢字資料としての承空本

――鎌倉期常用的漢字表記語彙――

表七として「承空本漢字表記率」を示した。表六の「承空本『篁物語』漢字表記索引」を元にして、各漢字表記語について、「漢字表記用例数÷その語の総用例数＝漢字表記率」を算出したものである。鎌倉時代に、カタカナ漢字混じり文において、どの漢字がどの程度定着していたかを知る資料となる。この「中世前期の常用的漢字表記語彙」の問題について、同時代の他の資料との比較や位置付けに関しては、紙幅の都合で別の機会に譲ることにしたい。

六　むすびとして

本稿では、篁物語の新資料である承空本に関する研究上の課題を指摘し、次の問題について述べた。

一　それが「親本」である可能性が低くないものの、諸本との比較がより多くの箇所で必要であり、その位置付けに、なお慎重な検討が必要である。

二　承空本の全文については、諸本比較のために、より詳しく正確な翻刻の確認が必要であり、特に「傍書・見せ消ち・重ね書き・空白・虫損」の箇所にも注意をして比較していく必要がある。

これらの点を踏まえて、新たな篁物語研究のために、現時点で必要と考えられた研究として、承空本を中心にいくつかの研究資料を提示した。承空本と書陵部本との間には、密接な関係が認められるものの、その中間になお別の本が介在した可能性もうかがえた。

紙幅の都合で取り上げなかった他の異同箇所については、機会を改めて、検討していくことにしたい。

【注】

(1)　これらアイウは執筆者が経験的に学んできた範囲で記したものであったが、念のため、書誌学の用語辞典などから以下に引用しておく。

○（アに相当）「写本における書写活動、版本における印刻活動、あるいは複製本の作成にあたって、全面的に依拠した本。その意味で底本と通じる面がある。（下略）」（井上宗雄ほか編一九九九『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店）

○（イに近い。傍線部参照。「また写しした本」でも「親本―子本」とある。）「○写本　手書きの本、肉筆の本の意で、前の本をまた写しした本のことではないので注意が必要である。／○転写本　親本（底本）をまた写しした本である。「乙本は甲本の転写本である」というように使われる。強いて言えば親本に対しての子の本（子本）である。」（藤井隆一九九一『日本古典書誌学総覧』和泉書院）

○（ウに相当）「親本　伝流の基になった本。祖本。」（川瀬一馬一九八二『日本書誌学用語辞典』雄松堂書店）

(2) この問題は、「書写本」という記載が辞書項目の解説という中でなされているので、ここではこれ以上立ち入らないでおく。

(3) 表作成には注意を払ったが、特に表二などは点検のたびに不整合が見出される状況であり、平林氏の誤植などを挙げたものの、本稿の表にも忌憚なき御指摘をいただければ幸いである。表一～六の作成では徳田結子の協力があった。表七は安部の指導のもと徳田が集計した。なお、これらの表の責任は一切安部に帰する。（徳田結子は学習院大学文学部日本語日本文学科学生）。

【補注】表二に次の校異を追加する。

九七	一三	ヲノカ	おのか	おのか	おのか

【参考文献】

小久保崇明編『篁物語校本及び総索引』（笠間書院、一九七〇）

石原昭平他『篁物語新講』（武蔵野書院、一九七七）

平野由紀子『小野篁集全釈（私家集全釈叢書三）』（風間書房、一九八八）

安部清哉「語彙・語法から見る資料――『篁物語』の成立時期をめぐりて――」（『国語学』一八四、一九九六）

安部清哉「篁物語」（佐藤・前田編『日本語学大辞典』（朝倉書店、未刊、項目執筆原稿提出済）

平林文雄・財団法人水府明徳会編著『増補改訂小野篁集・篁物語の研究　影印・資料・翻刻・校本・対訳・研究・使用文字分析・総索引』（和泉書院、二〇〇一）

久保木哲夫「解題（『小野篁集』）」『冷泉家時雨亭叢書第五期　承空本私家集　上（第五十二回配本第六十九巻）』の解題（朝日新聞社二〇〇二）

承空本「小野篁集」『冷泉家時雨亭叢書　第五期第六十九巻　承空本私家集　上』（朝日新聞社二〇〇二）

村田菜穂子『形容詞形容動詞の語彙論的研究』（笠間書院、二〇〇四、当該論文の初出は二〇〇〇年）

平林文雄「〈翻〉承空本片仮名書本『小野篁集』対校本」（『文学研究（日本文学研究会）』九五、二〇〇七・四）

井野葉子「浮舟物語における篁物語引用」（『清泉女子大学　人文科学研究所紀要』二九、二〇〇八・三）

（一）表一　承空本『小野篁集』翻刻（安部）

頁	丁・裏表・行	承空本　翻刻
八三	（一オ）一	オヤノイトヨクカシツキケル人ノ
八三	（一オ）二	ムスメアリケリ女ノスルサイノカキリ
八三	（一オ）三	シツクシテイマハフミヨマセントテ
八三	（一オ）四	ハカセニハムツカシカラン人ヲセントテ
八三	（一オ）五	コトハラノ子（右に「コ」）ノカミタイカクノシウ（「ウ」の右に「フ」）
八三	（一オ）六	ニテアリケリコトハラナレハウトク
八三	（一オ）七	テアヒミスナトアリケレトシラヌ
八三	（一オ）八	人ヨリハトテスタレコシニ木丁タ
八三	（一オ）九	テ、ソヨマセケルコノオトコイト
八三	（一オ）一〇	オカシキサマヲミテスコシナレ
八三	（一オ）一一	ユクマ、ニカホヲミエ物カタリナト
八四	（一ウ）一	モシテフミノテウ（「ウ」の上に「フ」となぞったか）イフ物ヲ（ウの右傍下に小文字で「本ニカク」とあり）
八四	（一ウ）二	トラセタリケルヲミレハカウヒチシ
八四	（一ウ）三	テ哥ヲナンカキタリケル
八四	（一ウ）四	ナカニユクヨシノ、カハ、アセナ、ン
八四	（一ウ）五	イモセノ山ヲコエテミルヘク
八四	（一ウ）六	トアリケレハカ、リケルト心ツカヒ
八四	（一ウ）七	シケレトナサケナクヤハトテ
八四	（一ウ）八	イモセ山カケタニミエテヤミヌヘシ
八四	（一ウ）九	ヨシノ、カハ、ニコレトソオモフ
八四	（一ウ）一〇	又オトコ
八四	（一ウ）一一	ニコルセハシハシハカリソミツシアラハ
八四	（一ウ）一二	スミ□（虫損。「ミ」の三画目のみあり。以下□は虫損で文字が判読不確定なもの。枠付き文字も同じ）ナントコソタノミワタラメ
八四	（一ウ）一三	女

頁	丁・裏表・行	承空本　翻刻
八四	（一ウ）一四	フチセヲハイカニシリテカワタラント
八四	（一ウ）一五	心ヲセキニ人ノイフラム
八五	（二オ）一	オトコ
八五	（二オ）二	身ノナランフチセモシラスイモセ川
八五	（二オ）三	オリタチヌヘキコ、チノミシテ
八五	（二オ）四	カクイフ程ニ人ニクカラヌヨナレハ
八五	（二オ）五	イトケフトクナカリケリシハスノ
八五	（二オ）六	モチコロ月イトアカキニ物カタリ
八五	（二オ）七	シケルヲ人ミテタレソアナスサマ
八五	（二オ）八	シ、ハスノ月夜トモアルカナントイ
八五	（二オ）九	ヒケレハ
八五	（二オ）一〇	春ヲマツ冬ノカキリトオモフニハ
八五	（二オ）一一	カノツキシモソアハレナリケル
八五	（二オ）一二	返シ
八五	（二オ）一三	トシヲヘテオモヒモアカシコノ月ハ
八五	（二オ）一四	ミソカノ人ヤアハレトオモハム
八五	（二オ）一五	カクイフホトニ夜フケニケレハ人
八五	（二オ）一六	ウタテミム物トテ入ニケリオトコ
八六	（二ウ）一	ハサウシニト（「モ」ミセケチで右に「ト」）ミニ
八六	（二ウ）二	モイラテウソ
八六	（二ウ）三	フキアリキケリサテアシタニ
八六	（二ウ）四	ヒサシウフミヨマセサリケレハチ、
八六	（二ウ）五	ヌシアヤシウタカムラカミエヌカナ
八六	（二ウ）六	トイヒテヨヒニヤルニオトロキテ
八六	（二ウ）七	レイノフミカキアツメテヲシヘケル
八六	（二ウ）八	マ、ニナムコノ女ノミ心ニ入テヒカ
八六	（二ウ）九	事ヲノミナムシケルカウヲシフル中
八六	（二ウ）一〇	ニカウヒチシテカヤウノ物ノフミ
八六	（二ウ）一一	ハヒカコトツカマツルラムコノコロハ物
八六	（二ウ）一二	オホエスヤ
八六	（二ウ）一三	君ヲノミオモフ心ハワスラレス
八六		チキリシコトモマトフ心カ

八六	（二ウ）一四	返シ
八七	（三オ）一	ハカセトハイカ、タノマムサトラレス
八七	（三オ）二	モノワスレスル人ノコ、ロヲ
八七	（三オ）三	又オトコ
八七	（三オ）四	ヨミキ、テヨロツノフミハワスルトモ
八七	（三オ）五	君ヒトリヲハオモヒモタラム
八七	（三オ）六	カクテコノオトコイテフクミヲソツ
八七	（三オ）七	ネ□（虫損）ツ（二画目虫損）クリ返ケルサテコノ女願ア
八七	（三オ）八	リテキサラキノハツムマニイナリ
八七	（三オ）九	ニマイリケリトモニ人オホクモアラ
八七	（三オ）一〇	テオトナ二人ワラハ二人ソアリケル
八七	（三オ）一一	オトナハ色々ノウチキフタリハオナ
八七	（三オ）一二	シヲナムキタリケル君ハアヤノカイ
八七	（三オ）一三	ネリノヒトヘカサネカラノウス物ノ
八七	（三オ）一四	サクラ色ノホソナカキテハナソメノ
八七	（三オ）一五	アヤノホソナカオリテソキタリケルカ
八八	（三ウ）一	ミハウルハシクテタケニ一尺ハカリ
八八	（三ウ）二	アマリテカシラツキイトキヨケナ
八八	（三ウ）三	リカホモアヤシウヨ人ニハニスメテ
八八	（三ウ）四	タウナムアリケルオノワラハ三四人
八八	（三ウ）五	サテハコノセウト、ソアリケルマホニハ
八八	（三ウ）六	アラネトサキタチヲクレテキケル
八八	（三ウ）七	マウテサマニコウシニケレハセウト
八八	（三ウ）八	イトオシカリテタカムラニカ、リ給
八八	（三ウ）九	ヘト□（虫損）ヨリケレハイテイナ／トイ
八八	（三ウ）一〇	ヒテミチ中ニヰニケリサル程ニ
八八	（三ウ）一一	兵衛佐ヨリノ人カタチキヨケニテ
八八	（三ウ）一二	トシ廿ハカリナリケルカマウテアヒテ
八八	（三ウ）一三	カヘサニ女ノミチニヰタルアナクルシ
八八	（三ウ）一四	カクテヤハイテタチ給ヘルモノネタ
八九	（四オ）一	ミシテオトコ申ニカシ（モに極似）ハクルマツ

八九	（四オ）二	クリテノセタテマツリテコノワタリ
八九	（四オ）三	ナルキサキノミネニスヱタテマツラム
八九	（四オ）四	女ノ事ニハタイワウサカトニハタレヲ
八九	（四オ）五	カ□（二画目虫損。次の「イ」までの間に五文字程度空白あり）□空白□イフホトニクレニケレハ
八九	（四オ）六	ワリコサカシテクワセントスルニコノ
八九	（四オ）七	スケヲヤリスクスコノオトコヤスム
八九	（四オ）八	ヤウニテオリテ
八九	（四オ）九	人シレス心タ、スノ神ナラハ
八九	（四オ）一〇	オモフ心ヲソラニシラナム
八九	（四オ）一一	返シ
八九	（四オ）一二	ヤシロニモマタキネスヱスイシカミハ
八九	（四オ）一三	シルコトカタシ人ノコ、ロヲ
八九	（四オ）一四	又モオコセケレトコノセウト□（虫損）ソカシ
八九	（四オ）一五	ク、ルマニノセテヰテイヌコノスケ人
八九	（四オ）一六	ヲツケテイツクニカイテヰヌルト
九〇	（四ウ）一	ミセケレハソノイヱトミテケリアシ
九〇	（四ウ）二	タニフミアリ神ノヲシヘタマヘシカハ
九〇	（四ウ）三	ナムサシテタテマツルカノイ□ツ□（虫損）ミノ
九〇	（四ウ）四	御モトニテケフアラハフミヲトリ
九〇	（四ウ）五	入テミレハコノセウトイテハシリテ
九〇	（四ウ）六	チ、ヌシモキ、タマフニイト物サハカシ
九〇	（四ウ）七	クコノワラハ、イツクカラキタルソ
九〇	（四ウ）八	イツレノスキ物ノ使ソトイヒケレ
九〇	（四ウ）九	ハ御フミハタテマツラセツレト昨日
九〇	（四ウ）一〇	イマセシヌシノイツレノツカヒソトノ
九〇	（四ウ）一一	給ヲウチカラハオキナヒタルコヱ
九〇	（四ウ）一二	ニテナニ事ソナトノタマヒツレハ
九〇	（四ウ）一三	ワツラハシサニナンマウテキヌルト
九〇	（四ウ）一四	イヒケレハトウメノワラハトイヒテ
九〇	（四ウ）一五	又ノアシタニ昨日ノ御返タヒ／イト
九一	（五オ）一	オホツカナシコノワラハノアトハカナク

九一	（五オ）二	テマウテキニシカハ
九一	（五オ）三	アトハカモナクヤナリニシハマチトリ
九一	（五オ）四	オホツカナミニサハクコ、ロカ
九一	（五オ）五	コノセウトタイカクニイテニケリヒス
九一	（五オ）六	マシワラハトリ入テタテマツルフミヲ
九一	（五オ）七	モトリタイカクノヌシモソミツク
九一	（五オ）八	ルチカカラン人ノイヱニスヱヨトテ昨日
九一	（五オ）九	モミシカトイサヤ
九一	（五オ）一〇	タマホコノミチカヒナリシ君ナレハ
九一	（五オ）一一	アトハカモナクナルトシラスヤ
九一	（五オ）一二	ミテサレタルヘキ人カナウタテマカ／／
九一	（五オ）一三	シウモイリタルカナイカ□（虫損）イハマシト
九一	（五オ）一四	オモフ時ノ大納言（虫損）ノ子ナリ□（虫損）リ
九一	（五オ）一五	ア□（虫損）
九一	（五オ）一六	ハカモナシトタレモミチニコソイリタ
		マヘリシカ
九二	（五ウ）一	シハスコニアトハカナシトイフ事モ
九二	（五ウ）二	オナシ道ニハ又モアヒナム
九二	（五ウ）三	マタコレヲレイノワラハモテキタリ（虫損。一画目なし）セウ
九二	（五ウ）四	トミチニサシアヒテイマコレヨリト
九二	（五ウ）五	イヒテヤリテケリカクナムトイヘハ
九二	（五ウ）六	レイノ心キモ、ナキワラハカナサキニ
九二	（五ウ）七	ケシキアシウイヒケム人ニヤトラ
九二	（五ウ）八	スヘキコノイナリニテマナラヒモノシ
九二	（五ウ）九	ケニ思ヘリシ物ソヤオトコヨリノ物
九二	（五ウ）一〇	ソヤソモ／／御返トリテヤリツ御返ニ
九二	（五ウ）一一	クシトオモフ物ノヤニセウトイテ
九二	（五ウ）一二	アヒテ御フミタテマツリ給人ハ夜ヘ
九二	（五ウ）一三	オトコニヌスマレタマヒニシカハモトメニ
九二	（五ウ）一四	ユクソモシコノ御フミタマヘル人トモ
九二	（五ウ）一五	シラスソ□チ（ソの次に一文字分の虫損あるか。踊り字のようにもみえる）イテユケトイヒケレハ

九三	（六オ）一	シリヘコタヘニコタヘテハシリニケリ
九三	（六オ）二	サモアラントイヒテフミモヤラス
九三	（六オ）三	ナリニケリ女セウトノハカリタルト
九三	（六オ）四	ハシラテアヤシウヲトツレヌト思フ
九三	（六オ）五	オリコノセウトレイノコトアルナリ
九三	（六オ）六	ミチアヒ人ノシリモシラヌ人ニフ
九三	（六オ）七	ミカヨハシケサウシ給人ノ御心ニコソ
九三	（六オ）八	アリケレカノ人ハ御メニヤカテアハセ
九三	（六オ）九	タテマツランナカルトコソヨカラメ
九三	（六オ）一〇	ユルサレタマヒテハフヨフソナトイヒ
九三	（六オ）一一	ケレハナテウメニカツカンイカニシリ
九三	（六オ）一二	テカトモカウモオモハン世ヲシラサラ
九三	（六オ）一三	ン人ハサヤウニモイハテコソアラメ
九三	（六オ）一四	ミツカスノ御アリサマヤ心ウシオモ
九三	（六オ）一五	ハスナリナトイヘハイモトイトオシ
九四	（六ウ）一	ウテナニカメニ子（虫損）カサラン人ヲ
九四	（六ウ）二	シヒモミタマヘトオモハントテイリ
九四	（六ウ）三	ニケリレイノフミヨミテナイシニ
九四	（六ウ）四	ナサンノ心アリテオヤハフミヲ、シフ
九四	（六ウ）五	ルナリケリフミカヨハシニハシラタ
九四	（六ウ）六	レトコノセウト心ヲマトハシテオモヒ
九四	（六ウ）七	イテラレケリオトコイフヤウカ
九四	（六ウ）八	クオモヒイテラレカキリナキ心
九四	（六ウ）九	ヲシヒシラスシテヨソナル人ヲオ
九四	（六ウ）一〇	モヒタマヘルコソツラケレメニチカク（「メニ」の右側に斜線あり。歌であることを示す）
九四	（六ウ）一一	ミルカヒモナクオモヘトモ心ヲホカニ
九四	（六ウ）一二	ヤラハツラシナトイヒケレハ人ノ御心
九四	（六ウ）一三	モ、シラスヤ
九四	（六ウ）一四	アハレトハ君ハカリヲソオモフラム
九四	（六ウ）一五	ヤルカタモナキ心トヲシレ

九五	（七オ）一	オモクアナ（「ル」ミセケチで右に「ナ」）ヤトイ
九五	（七オ）二	ヒケレハスコシ心
九五	（七オ）三	ユキテ
九五	（七オ）四	イト、シク君カナケキノコカルレハ
九五	（七オ）五	アラヌオモヒモ、ヘマサリケリ
九五	（七オ）六	カクイヒテ心ハカヨヒケレトオヤニモツ、
九五	（七オ）七	ミ人ニモサハリケレハ心トケテヒサシ
九五	（七オ）八	クモカタラハスアリサレトイカテカ
九五	（七オ）九	イリケムコノイモウトノネタル所ヘ入
九五	（七オ）一〇	ニケリイトシノヒテマタ夜フカクイテ
九五	（七オ）一一	ニケリタマサカニイリハ入タリケレト
九五	（七オ）一二	アフコトハカタカリケリツネニムカヒ□（虫損）
九五	（七オ）一三	ケレハヨルハアハス中／／ニ心ハソラ
九五	（七オ）一四	ニテイカニセント思ナケキテ
九五	（七オ）一五	ウチトケヌ物ユヘユメヲミテアカヌ
九五	（七オ）一六	モノオモフコロニモアルカナ
返シ		
九六	（七ウ）一	キヲネスハユメニモミエシヲアフコトノ
		ナケク／／モア□（虫損。二画目なし）シハテ
九六	（七ウ）二	シヲ
九六	（七ウ）三	カクユメノ事アル人ハハラミニケリ
九六	（七ウ）四	フミヨム心地モナシレイノサハリセ
九六	（七ウ）五	スナトウタテアルケシキヲミテ
九六	（七ウ）六	コノセウトモイトヲシトミテ人／／ハ
九六	（七ウ）七	ルノ事ニヤアリケムモノモクハ
九六	（七ウ）八	テハナカウシタチハナヲナムネカ
九六	（七ウ）九	イケルシラヌホトハオヤモトメテ
九六	（七ウ）一〇	クハスセウトタイカクノアルシス
九六	（七ウ）一一	ルニミナトラマホシトオモヒケレト
九六	（七ウ）一二	二三ハカリタ、ウカミニ入テトラス
九六	（七ウ）一三	アタニチル花タチハナノニホヒニハ
九六	（七ウ）一四	ミトリノキヌノカニ（右に「コ」）ソマサラメ
九六	（七ウ）一五	コレヲキコシメスナレハナム返事

九七	（八オ）一	ニ御フトコロニアリケレハナ□（虫損）
九七	（八オ）二	ワタリトヤ花タチハナヲカキツレハ
九七	（八オ）三	ミトリノカサヘウツラサリケリ
九七	（八オ）四	カ、ルコトヲハ、オト、キ、タマヒ
九七	（八オ）五	テ物モノ給ハテウカ、ヒ給テ
九七	（八オ）六	ムカヒタマヒタリケルヲテヲトリ
九七	（八オ）七	テヒキモテイキテヘヤニコメテ
九七	（八オ）八	ケリコレヲチ、ヌシ（「ヤ」ミセケチ右に「シ」）キ、
		タマヒテ
九七	（八オ）九	ノトカナリケル人ナリケレハオノコ
九七	（八オ）一〇	モカシコキ物ニテ女オサナキ物ニ
九七	（八オ）一一	アラスサシタルヤウアラムナヲユル
九七	（八オ）一二	シタマヒテノタマヘトアリケレハ
九七	（八オ）一三	ヲノカ身（「事」ミセケチで右に「身」とある）
		ヲ思フトテノ給ニト
九七	（八オ）一四	テイヨ／／カキノ□（虫損）ナニツチヌリ
九七	（八オ）一五	テタイカクノヌシヲハイヱノ中ニ
九八	（八ウ）一	ナ入ソトテオイケレハサウシニコモ
		リキテナキケリ□（虫損か書き損じか）イモウト
九八	（八ウ）二	ノコモ
九八	（八ウ）三	リタル所ニイキテミレハカヘノア
九八	（八ウ）四	ナノイサ、カアリケルヲクシリテ
九八	（八ウ）五	コ、モトニヨリ給ヘトヨヒヨセテ
九八	（八ウ）六	物カタリシテナキオリテイテナ（「ヌ」をみせけ
		ちで「ナ」）
九八	（八ウ）七	マホシク思ヘトモマタイトワカウテ
九八	（八ウ）八	ネタリタヘキ人モナクワヒケレハ
九八	（八ウ）九	トモカクモエセテイトイミシク
九八	（八ウ）一〇	オモヒテカタラヒヲル程ニ夜ア
九八	（八ウ）一一	ケヌヘシオトコ
九八	（八ウ）一二	カスナラハカ、ラマシヤハ世中ニ
九八	（八ウ）一三	イトカナシキハシツノヲタマキ
返シ		
九八	（八ウ）一四	

九八	（八ウ）一五	イサヽメニツケシオモヒノケフリコソ
九八	（八ウ）一六	身ヲウキクモトナリテハテケレ
九九	（九オ）一	トイヒテナキアヘリケリヨアケニ
九九	（九オ）二	ケレハサウシニ帰リテコノヲンナ
九九	（九オ）三	クヒツヘキヤウニ物ヲ返テモテイカン
九九	（九オ）四	トスルニ心マトヒシテアシモエフミタ
九九	（九オ）五	テス物オホエサリケレハムツマシウ
九九	（九オ）六	ツカフサウシキヲツカヒニテタヽイマ
九九	（九オ）七	心地アシウテエマイリコスソノホト
九九	（九オ）八	コレスキタマヘタメラヒテマイラム
九九	（九オ）九	女アナノモトニテマツニカクイヒタレ
九九	（九オ）一〇	ハ
九九	（九オ）一一	タカタメトオモフイノチノアラハコソ
九九	（九オ）一二	ケヌヘキ身（「物」ミセケチで「身」）ヲモオシ
		ミトヽメヽ
九九	（九オ）一三	トリ入ス返テカクナントイヒケレハ
九九	（九オ）一四	カシ□（虫損）ウ（「ク」とも「ウ」ともよめる）
		シテマタ／＼行テミレハ三四
九九	（九オ）一五	日物モクハテ物ヲオモヒケレハイト
九九	（九オ）一六	クチオシウイキモセスイカヽオハシ
九九	（九オ）一七	マストイヒケレハ
一〇〇	（九ウ）一	キエハテヽ身（「事」の右に別の草書体で「身」とあり）コ（「身」と「ソ」の間の右行間に「コ」あり）ソハルカニナリハテメ
一〇〇	（九ウ）二	ユメノタマヽ（踊字か「ハ」の右の点の虫損か）
一〇〇	（九ウ）三	返シ
一〇〇	（九ウ）四	タマシヰハ身（「事」の右に別の草書体で「身」とあり）ヲモカスメスホノカニテ
一〇〇	（九ウ）五	君マシリナハナニヽカハセム
一〇〇	（九ウ）六	トテヨロツノ事ヲイヒテナケトイラ
一〇〇	（九ウ）七	ヘセスナリニケレハシヌトテナキサハケ
一〇〇	（九ウ）八	ハコエヲキヽテトキアケテミレハタ
一〇〇	（九ウ）九	エイルケシキヲミテマトヒイテヽ

一〇〇	（九ウ）一〇	ホカノイエニヰニケリオヤイテヽ
一〇〇	（九ウ）一一	ノチニイテヰテイリテミレハシニテ
一〇〇	（九ウ）一二	フセリナキヨヘトカヒナシソノ日ノ
一〇〇	（九ウ）一三	ヨサリ火ヲホノカニカキアケテナ
一〇〇	（九ウ）一四	キフセリアトノカタソヽメキケリ火
一〇〇	（九ウ）一五	ヲケチテミレハソヒフス心地シケ
一〇〇	（九ウ）一六	リシニシイモウトノコエニテヨロツ
一〇〇	（九ウ）一七	ノカナシキ事ヲイヒテナ□（「ク」の一画目か虫損）□（虫損）ヱ
一〇一	（一〇オ）一	モイフコトモタヽソレナレハモロトモ
一〇一	（一〇オ）二	ニカタラヒテナク／＼サクレハテニモ
一〇一	（一〇オ）三	サハラステニタニアタラスフトコロニ
一〇一	（一〇オ）四	カキ入テ我身（「事」の右に別の草書体で「身」とあり）ノナランヤウモ
一〇一	（一〇オ）五	フサマホシキ事カキリナシ
一〇一	（一〇オ）六	ナキナカスナミタノウヘニアリシニモ
一〇一	（一〇オ）七	サラヌアハヌウカヘル本
一〇一	（一〇オ）八	女返シ
一〇一	（一〇オ）九	ツネニヨルシハシハカリハアハナレハ
一〇一	（一〇オ）一〇	ツヰニトケナムコトソカナシキ
一〇一	（一〇オ）一一	トイウ程ニ夜アケニケレハナクオヤ
一〇一	（一〇オ）一二	ハステヽヰニケレハトカクオサムルコトハ
一〇一	（一〇オ）一三	タヽコノセウトソシケル人ハミナステ
一〇一	（一〇オ）一四	テ行ニケレハセウトスンサ三四人
一〇一	（一〇オ）一五	カクサウ一人シテコノ女ヲシニケル
一〇一	（一〇オ）一六	オヤ（「ヤ」と「イ」の間の右行間に「ヲ」あり）ヲイトヨクハラヒ（「ヒ」ミセケチで右に「ハ」）テハナカウタキ
一〇一	（一〇オ）一七	テトヲキ所ニ火ヲトモシテイタレ
一〇二	（一〇ウ）一	ハコノタマシヰヨナ／＼キテカタラ
一〇二	（一〇ウ）二	ヒケル三七日イトアサヤカナリ
一〇二	（一〇ウ）三	七日時／＼ミエケ（「ス」ミセケチで「ケ」）リコ
一〇二	（一〇ウ）四	ノオトコナミ
		タツキセスナクソノナミタヲスヽリ

一〇二　（一一〇ウ）五　ノ水ニテ法花経ヲカキテヒエノ
一〇二　（一一〇ウ）六　七日ノワサシケリソノ人七日ハナ
一〇二　（一一〇ウ）七　シハテ、モホノメク事タエサリケ
一〇二　（一一〇ウ）八　リ三年スキテハユメニモタシカ
一〇二　（一一〇ウ）九　ニハミエサリケリナヲカナシカリケ
一〇二　（一一〇ウ）一〇　レハハシメノコトシテナムマカセタリ
一〇二　（一一〇ウ）一一　ケルメニモヲラテヒトリナムアリ
一〇二　（一一〇ウ）一二　ケル時ノ右大臣ノ女タマヘトフミヲ
一〇二　（一一〇ウ）一三　オモシロクツクリテウチニマイリタ
一〇二　（一一〇ウ）一四　マウトテ御クルマヨリトホリタマフコト
一〇二　（一一〇ウ）一五　ニツイフルマヒテタテマツレ侍ニト
一〇二　（一一〇ウ）一六　リテミタマヒウケタマハリヌ〔イ〕（虫損）マ
一〇三　（一一一オ）一　イヱニマカリテ御返キコエントノ給
一〇三　（一一一オ）二　タイカクニ入ニケリ殿ニカヘリ給テ
一〇三　（一一一オ）三　御女三人オハシケリ大君ニシカ／ノ
一〇三　（一一一オ）四　コトナムアルイカニトキコヱ給ヘハエシ
一〇三　（一一一オ）五　テナキテ入給ヌ中ノ君オナシ事
一〇三　（一一一オ）六　キコエタマフ三ノ君ニキコエ給トモ
一〇三　（一一一オ）七　カクモオホセコトニコソシタカハメトノ
一〇三　（一一一オ）八　給ヘハイトキヨケニシムテムツクリテ
一〇三　（一一一オ）九　ヨキヒシテヨヒタマフ御セウソコア
一〇三　（一一一オ）一〇　リケレハイトカナシウツルハミノキヌ
一〇三　（一一一オ）一一　ノヤレコウシタルキテ、リキタルク
一〇三　（一一一オ）一二　ツハキテフクメルフミノナクトリテ
一〇三　（一一一オ）一三　キニケリタウノウチニイリテマツ
一〇三　（一一一オ）一四　コノフミマキヲタマヘレハトリタマハネ
一〇三　（一一一オ）一五　ハタカムラサシテイケハコノ君カハノ
一〇三　（一一一オ）一六　ヲヒヲトリテヒキトメタマヘハトマ
一〇三　（一一一オ）一七　リ給ニケリコレヲカイマミテチ、
一〇四　（一一一ウ）一　オト、ミ給〔ア〕（虫損）イトカシコウシツ、
一〇四　（一一一ウ）二　ヨロコヒタマフイテ、イナマシイカニ
一〇四　（一一一ウ）三　人キ、ヤサシカラマシイトカシコキ

一〇四　（一一一ウ）四　コトナリトヨロコヒ給〔一二〕日ノ夜（〔三〕とも読める）
一〇四　（一一一ウ）五　イトイカメシウシテマチタマフタ、
一〇四　（一一一ウ）六　ワラハヒトリソクシタマヒケルサテ
一〇四　（一一一ウ）七　コノコロイモフトノアルヤニキキ
一〇四　（一一一ウ）八　タリケレハイトカナシカリケレハ
一〇四　（一一一ウ）九　ネニケリイモウト
一〇四　（一一一ウ）一〇　ミシ人ニソレカアラヌカオホツカナ
一〇四　（一一一ウ）一一　物ワスレセシトオモヒシ物ヲ
一〇四　（一一一ウ）一二　トイヒケレハカノ殿ニモイカテソナキ
一〇四　（一一一ウ）一三　ヲリケルヒサシウコネハ大殿アヤシト
一〇四　（一一一ウ）一四　オホシケリ七日ハカリアリテキタリ
一〇四　（一一一ウ）一五　ナトカミエタマハサリケルトノ給ヘハ
一〇四　（一一一ウ）一六　スナヲナリケル人ニテコトカクシテ
一〇四　（一一一ウ）一七　イヒケレハメイトアルヘカシキ事ニテ
一〇五　（十二オ）一　アハレノ事ヤ我カタメニモサラス
一〇五　（十二オ）二　ハオハセメワイテモコソハムカシ人ハ
一〇五　（十二オ）三　心モカタチモサ物シ侍ケレハコソトシ
一〇五　（十二オ）四　ヲヘテエワスレカタクシタマフラメサル
一〇五　（十二オ）五　人ヲミ侍ケンニイヒシラテミエタテ
一〇五　（十二オ）六　マツルヨノチノ世イカナラム
一〇五　（十二オ）七　アカスシテスキケル人ノタマシキニ
一〇五　（十二オ）八　イケル心ヲミセ侍ラム
一〇五　（十二オ）九　アナハツカシトノ給ニオトコナニカ
一〇五　（十二オ）一〇　ソレハオホシメスカクテハハテハエシ
一〇五　（十二オ）一一　ロシメサシ御タマシキノアルヤウモ
一〇五　（十二オ）一二　ミルヘク心ミニサヤナリタマハヌトテ
一〇五　（十二オ）一三　ワカレナハヲノカタマ／ナリヌトモ
一〇五　（十二オ）一四　オトロカサネハアラシトソオモフ
一〇五　（十二オ）一五　イテ、マカリシヲヒキト、メテ
一〇五　（十二オ）一六　ケフマテサフラハセ給ウルサシカシ
一〇六　（十二ウ）一　トイヒケルコノオトコハワカキアヒタ
一〇六　（十二ウ）二　ハイトネムコロニミエテホカニヨカレ

一〇六	（十二ウ）三	ナトモシケリナリイテ、サイサウヨリモカミニナリニケリコレナムナニタツタカムラナリケルサイカクハサラニモイハスウタツクルコトモエタリカホニコノクニノ人ニハタヘスソアリケルコノコムコ（「コ」の右に別筆？でラか）ノ、コテカクウタヨマヌハナカリケリキ、タマハサリシアネ二所ハイトワロキ人ノメニテコノ御トクヲミタマヒケルイトヨクナリイ（「ハ」ミセケチで「イ」）テケレハコノ三ノ君ヲマタ二ナクモテカシツキタテマツルイマノ人マサニ大カクノシフヲムコニトル大臣モアランヤタ、心タカキサイヲトリタマフナルヘシマタアシ（「ア」と「シ」の間の右行間に「ラ」追記）カシカヤウニオモヒテフミツクルヒトハ
一〇六	（十二ウ）四	
一〇六	（十二ウ）五	
一〇六	（十二ウ）六	
一〇六	（十二ウ）七	
一〇六	（十二ウ）八	
一〇六	（十二ウ）九	
一〇六	（十二ウ）一〇	
一〇六	（十二ウ）一一	
一〇六	（十二ウ）一二	
一〇六	（十二ウ）一三	
一〇六	（十二ウ）一四	
一〇六	（十二ウ）一五	
一〇六	（十二ウ）一六	
一〇六	（十二ウ）一七	
一〇七	（十三オ）一	

（二）表二　『篁物語』承空本対校四本校異一覧　（安部清哉・徳田結子作成）

承空本頁	承空本行	冷泉家蔵承空本	宮内庁書陵部本	彰考館蔵甲本（枡形袋綴本）	彰考館蔵乙本（美濃大判袋綴本）
八三	二	サイ	さい	さえ	さえ
八三	四	ムツカシカラン	むつかしからむ	むつましからむ	むつましからむ
八三	五	カミタイカク	かみたいかく	大学	大学
八三	六	コトハラナレハ	ことはらなれは	ことはらなりけれは	ことはら成けれは
八三	七	ミス	みす	みす	見す
八三	八	木丁	木丁	几帳	几帳
八三	一一	物カタリ	ものかたり	物語	物語
八四	一	フミ	ふみ	文	文
八四	一	テウ（「ウ」の上に「フ」となぞったか）	ちり	てと	てと
八四	一	物	物	もの	もの
八四	二	カウヒチ	かうひち	かくひち	かくひち
八四	三	哥	哥	一首	一首
八四	四	ナカ	中	なか	なか
八四	四	カハ	河	河	河
八四	五	コエテ	こえて	こゑて	こゑて
八四	五	ミル	みる	みる	見る
八四	六	心ツカヒ	心つかひ	こゝろつかい	こゝろつかい
八四	八	ヤミヌヘシ	やみぬへし	やみぬへく	やみぬへく
八四	九	ヨシノ、カハ、	よし野のかはゝ	よしのゝ、河は	よしのゝ、川は
八四	一〇	又	又	また	また
八四	一二	ン	む	ん	ん
八四	一三	女	女	をんな	をんな
八四	一四	ン	む	む	ん
八四	一五	心	こゝろ	こゝろ	こゝろ
八四	一五	セキニ	せきに	さきに	さきに
八四	一五	ラム	らん	らん	らん
八五	二	身	身	み	み
八五	二	ン	む	む	ん
八五	二	フチセ	ふち瀬	ふちせ	ふちせ
八五	二	川	河	かは	かは
八五	三	コ、チ	こゝ地	こゝち	こゝち
八五	五	ケフトク	けふとく	けうとく	けうとく
八五	六	物カタリ	物かたり	物語	物語
八五	七	ミテ	みて	みて	見て
八五	八	、ハス	しはす	しはす	しはす
八五	八	アルカナントト	あるかなんと	あるかなと	あるかなと

八五	一一	ツキシモ	月霜	月しも	月しも
八五	一二	返シ	返し	かへし	かへし
八五	一三	オモヒ	おもひ	おもふ	おもふ
八五	一四	人	人	ひと	ひと
八五	一四	オモハム	おもはん	おもはむ	おもはん
八五	一五	ホト	程	ほと	ほと
八五	一六	ミム物	みむ物	みんもの	みんもの
八五	一六	入	入	いりに	いりに
八六	三	ヒサシウ	ひさしう	ひさしく	ひさしく
八六	四	アヤシウ	あやしう	あやしく	あやしく
八六	四	ミエ	みえ	見え	見え
八六	五	オトロキテ	おとろきて	おとこきて	おとこきて
八六	六	フミ	ふみ	ふみ	文
八六	六	ヲシヘ	おしへ	をしへ	をしへ
八六	七	ナム	なむ	なん	なん
八六	七	心	心	こゝろ	こゝろ
八六	七	入テ	入て	いりて	いりて
八六	八	事	事	こと	こと
八六	八	ヲシフル	おしふる	をしふる	をしふる
八六	九	カウヒチ	かうひち	かくひち	かくひち
八六	九	カヤウノ	かやうの	かやう	かやう
八六	九	物	物	初（本まゝ）	初（本まゝ）
八六	一〇	ラム	らむ	らん	らん
八六	一〇～一一	物オホエスヤ	ものおほへすや	物おほえすそや	物おほえすそや
八六	一二	君	君	君	きみ
八六	一二	心	心	こゝろ	こゝろ
八六	一三	チキリ	ちきり	契	契
八六	一三	マトフ心	まとふ心	まとふこゝろ	まとふこゝろ
八六	一四	返シ	かへし	かへし	かへし
八七	一	ム	む	む	ん
八七	一	サトラレス	さとられす	ひとしれす	ひとしれす

八七	五	ム	きみ	君	君
八七	六	オトコイテフクミ	おとこいてふくみ	おとこはてふくみ	おとこはてふくみ
八七	七	返ケル	返ける	かへける	かへける
八七	一一	色々	色〃	いろ／＼	いろ／＼
八七	一二	オナシ	おなし	おなしいろ	おなしいろ
八七	一二～一三	カイネリ	かひねり	かいねり	かいねり
八七	一三	物ノ	ものの	もの、	もの、
八七	一四	色	色	いろ	いろ
八七	一五	オリテ	おりて	をりて	をりて
八七	二～三	キヨケナリ	きよけなり	きよけにて	きよけにて
八八	三	アヤシウ	あやしう	あやしく	あやしく
八八	四	メテタウナム	めてたうなん	めてたくなん	めてたくなん
八八	五	マホ	まほ	ませ	ませ
八八	八	オシカリテ	おしかりて	おかしかりて	おかしかりて
八八	一〇	ミチ	道	道	道
八八	一〇	ヰニけり	ゐにけり	いにけり	いにけり
八八	一一	兵衛佐ヨリ	兵衛佐より	兵衛すけはかり	兵衛すけはかり
八八	一四	イテタチ給ヘル	いてたち給へる	ゐてたち給へる	ゐてたち給つる
八八	一四	モノネタミ	物ねたみ	ものねたみ	ものねたみ
八九	一	カシ（モニ極似）ハクルマ	かもは車	かしは車	かしは車
八九	二	ノセタテマツリテ	のせたてまつりて	（なし）	（なし）
八九	三	キ	き	木	木
八九	三	ミネ	みね	屏	屏
八九	三	スエ	すへ	すへ	すへ
八九	三	ム	む	む	ん
八九	四	事	事	身	身
八九	四	タイワウ	たいわう	大王	大王

八九	四	サカト	さかと	みかと	みかと
八九	五	タレヲカト	たれをかと	たれをかを と、	たれをかを と、
八九	五	クレニケレハ	くれにけれは	くれぬけれは	くれぬけれは
八九	六	クワセン	くわせん	くはせん	くはせん
八九	七	オトコ	男	おとこ	おとこ
八九	九	人シレス	人しれす	人しれぬ	人しれぬ
八九	九	心タ、ス	心た、す	こ、ろた、す	こ、ろた、す
八九	一〇	オモフ心	おもふ心	おもふこ、ろ	おもふこ、ろ
八九	一〇	ソラ	空	そら	そら
八九	一〇	ナン	なむ	なむ	なむ
八九	一一	返シ	かへし	かへし	かへし
八九	一二	マタキネス エス	またきねす へす	あたきねす ゑぬ	あたきねす ゑぬ
八九	一二	イシカミ	いしかみ	石神	石神
八九	一四	又	又	また	また
八九	一四～一五	□（虫損） ソカシク	いそかしく	いそかして	いそかして
八九	一五	ヽルマ	車	くるま	くるま
八九	一六	イテヰヌル	いてゐぬる	ゐていぬる	ゐていぬる
九〇	一	イエ	家	いゑ	いゑ
九〇	一	ミセ	見せ	みせ	みせ
九〇	二	ヲシヘタマ ヘ	をしへたま へ	をしへ給	をしへ給
九〇	三	ナム	なん	なむ	なむ
九〇	三	イシカミ	いしかみ	石神	石神
九〇	五	入テ	入テ	いれて	いれて
九〇	六	チヽヌシモ	ちヽぬしも	ちヽぬし	ちヽぬし
九〇	六	キヽタマフ ニ	きヽたまふ に	き、給に	き、給に
九〇	六	物サハカシ ク	物さはかし く	ものさはか しう	ものさはか しう
九〇	七	キタルソ	きたるそ	きたるに	きたるに

九〇	八	スキ物ノ使	すき物の使	すきもの、 つかひ	すきもの、 つかひ
九〇	九	昨日	昨日	きのふ	きのふ
九〇	一〇	イツレノツ カヒ	いつれの使	いつれのつ かひ	いつれのつ かひ
九〇	一二	事	事	こと	こと
九〇	一三	ノタマヒ	の給	の給	の給
九〇	一三	ナン	なん	なむ	なむ
九〇	一四	ワラハ	わらは	わらはや	わらはや
九〇	一五	又	又	また	また
九〇	一五	御返	御かへし	御返	御返
九一	二	マウテキニ シカハ	まうてきに しかは	まてきにし かは	まてきにし かは
九一	三	ナリニシ	なりにし	ありにし	ありにし
九一	三	ハマチトリ	はま千鳥	はまちとり	はまちとり
九一	四	ナミ	なみ	なみ	浪
九一	四	コヽロ	こゝろ	ところ	ところ
九一	五	タイカク	たいかく	大かく	大かく
九一	六	トリ入テ	とり入れて	とりいれて	とりいれて
九一	七	タイカク	たいかく	大かく	大かく
九一	七	ソミツクル	そ見つくる	ふみつくる	ふみつくる
九一	八	チカカラン	ちか、らん	ちか、らん	ちか、らん
九一	八	イエ	家	いゑ	いゑ
九一	八	スエヨ	すへよ	すゑよ	すゑよ
九一	九	ミシカト	みしかと	みしかとも	みしかとも
九一	一〇	タマホコ	玉鉾	たまほこ	たまほこ
九一	一〇	ミチカヒ	みちかひ	みちかゐ	みちかゐ
九一	一四	時ノ大納□ （「言」虫損）	時の大納言	時大納言	時大納言
九一	一五～一六	イリタマヘ リシカ	いりたまへ りしか	ゐ給へりし か	ゐ給へりし か
九二	一	シハスコニ	しはすこに	しは／／に	しは／／に
九二	一	事	事	こと	こと
九二	二	道	道	みち	みち

九二	二	又	アヒナム	あひなん
九二	二	又	カクナムト	かくなんと
九二	五	又	心キモ	心きも
九二	六	又	イヒケム	いひけん
九二	七	又	思ヘリシ物	思へりし物
九二	九	又	オトコヨリノ物ソヤ	おとこよりの物そや
九二	九～一〇	又	御返	御返
九二	一〇	又	物ノヤニ	物のやに
九二	一一	又	タマヒニシカハ	たまひにしかは
九二	一三	又	ユクソ	ゆくそ
九二	一四	又	タマヘル	たまへる
九二	一四	又	ソ?チイテユケ	そ□（虫損跡）いてゆけ
九三	一五	又	コタヘニ	こたへに
九三	一	又	アラン	あらむ
九三	二	又	イヒテ	いひて
九三	二	又	思フオリ	思ふおり
九三	四～五	又	ミチアヒ人	道あひ人
九三	六	又	御心ニコソ	御心にこそ
九三	七	又	人	人
九三	八	又	ナカルトコソ	なかるとこそ
九三	九	又	タマヒテハ	たまひては
九三	一〇	又	フヨフソ	ふよふそ
九三	一〇	又	ナテウ	なてふ
九三	一一	又	世	世
九三	一二	又	ミツカスノ	見つかすの
九三	一四	又	心ウシ	心うし
九二	二	また	アヒナム	あひなん
九二	五	また	カクナムト	かくなんと
九二	六	また	心キモ	こゝろきも
九二	七	また	イヒケム	いひけむ
九二	九	また	思ヘリシ物	おもへりしもの
九二	九～一〇	また	オトコヨリノ物ソヤ	おとこよりのものそや
九二	一〇	また	御返	御かへり
九二	一一	また	物ノヤニ	もののやうに
九二	一三	また	タマヒニシカハ	たまひしかは
九二	一四	また	ユクソ	ゆくを
九二	一四	また	タマヘル	給へる
九二	一四	また	ソ?チイテユケ	うちいていけ
九三	一五	また	コタヘニ	こたゑに
九三	一	また	アラン	あらん
九三	二	また	イヒテ	おもひて
九三	二	また	思フオリ	思をり
九三	四～五	また	ミチアヒ人	みちあひ
九三	六	また	御心ニコソ	御こゝろこそ
九三	七	また	人	ひと
九三	八	また	ナカルトコソ	なかうとこそ
九三	九	また	タマヒテハ	たまはては
九三	一〇	また	フヨフソ	ふようそ
九三	一〇	また	ナテウ	なてう
九三	一一	また	世	よ
九三	一二	また	ミツカスノ	見つかすの
九三	一四	また	心ウシ	こゝろうしと
九二	二	また	アヒナム	あひみん
九二	五	また	カクナムト	かくなんと
九二	六	また	心キモ	こゝろきも
九二	七	また	イヒケム	いひけむ
九二	九	また	思ヘリシ物	おもへりしもの
九二	九～一〇	また	オトコヨリノ物ソヤ	（なし）
九二	一〇	また	御返	御かへり
九二	一一	また	物ノヤニ	もののやうに
九二	一三	また	タマヒニシカハ	たまひしかは
九二	一四	また	ユクソ	ゆくを
九二	一四	また	タマヘル	給つる
九二	一四	また	ソ?チイテユケ	うちいていけ
九三	一五	また	コタヘニ	こたゑに
九三	一	また	アラン	あらん
九三	二	また	イヒテ	おもひて
九三	二	また	思フオリ	思をり
九三	四～五	また	ミチアヒ人	みちあひ
九三	六	また	御心ニコソ	御こゝろこそ
九三	七	また	人	ひと
九三	八	また	ナカルトコソ	なかうとこそ
九三	九	また	タマヒテハ	たまはては
九三	一〇	また	フヨフソ	ふようそ
九三	一〇	また	ナテウ	なてう
九三	一一	また	世	よ
九三	一二	また	ミツカスノ	見つかすの
九三	一四	また	心ウシ	こゝろうしと

九三	一五	イモト	メニ□（虫損）カサラン	めに□（右傍に「虫損」）かさらん
九四	一	イモト	ミタマヘトオモハン	みたまへとおもはむ
九四	二	イモト	フミヨミテナイシ	ふみよみてないし
九四	三	イモト	フミヲ、シフル	ふみを、しふる
九四	四	イモト	シラタレト	しらたれと
九四	五	イモト	心	心
九四	八	イモト	ヲシ(モ?)ヒシラスシテ	をしひしらすして
九四	九	イモト	ミルカヒモナク	見るかひもなく
九四	一一	イモト	オモヘトモ	おもへとも
九四	一一	イモト	心	心
九四	一一	イモト	御心モ、シラスヤ	御心も、しらすや
九四	一二～一三	イモト	オモフラム	おもふらむ
九四	一四	イモト	心	心
九四	一五	イモト	オモクアナ（「ル」ミセケチで「ナ」）ヤ	おもくの（「の」の右傍に「不審」）なや
九五	一	いもと	心ゆきて	心ゆきて
九五	一～二	いもと	アラヌオモヒモ、ヘ	あらぬおもひも、へ
九五	四	いもと	心ハ	心は
九五	五	いもと	心トケテ	心とけて
九五	六	いもと	サレト	されと
九五	七	いもと	所へ入ニケリ	所へ入ニケリ
九五	八	いもと	入ニ	入に
九五	八	いもうと	めにちかさらん	めにちかさらん
九五	一	いもうと	見給へとおもはん	見給へとおもはん
九五	二	いもうと	ふみよみにいり侍	ふみよみに内侍
九五	三	いもうと	こゝろ	こゝろ
九五	四	いもうと	ふみをしふる	ふみをしふる
九五	五	いもうと	しゝたれと	しゝたれと
九五	八	いもうと	こゝろ	こゝろ
九五	九	いもうと	を思しらすして	を思しらすして
九五	一一	いもうと	みるかいもなく	みるかいもなく
九五	一一	いもうと	おもふとも	おもふとも
九五	一一	いもうと	こゝろ	こゝろ
九五	一一	いもうと	御こゝろもしらすや	御こゝろもしらすや
九五	一四	いもうと	おもふらん	おもふらん
九五	一五	いもうと	こゝろ	こゝろ
九五	一	いもうと	おもひくさなや	おもひくさなや
九五	一～二	いもうと	こゝろゆきて	こゝろゆきて
九五	四	いもうと	やらぬおもひもゝへ	やらぬおもひもゝえ
九五	五	いもうと	こゝろは	こゝろは
九五	六	いもうと	こゝろとけて	こゝろとけて
九五	七	いもうと	されと	けれと
九五	八	いもうと	ところへいりにけり	ところへいりにけり
九五	八	いもうと	いりに	いりに

九五	一〇	イリハ入タリケレト	いりは入たりけれと
九五	一一～一二	ムカヒニ（ニ一虫損）ケレハ	むかひにけれは
九五	一三	思ナケキテ	思なけきて
九五	一三	イカニセン	いかにせむ
九五	一四	物ゆへ	物ゆへ
九五	一四	ユメ	ゆめ
九五	一四	ミテ	みて
九五	一四	アカヌ	あかぬ
九五	一五	コロ	ころ
九五	一六	返シ	返し
九六	一	ヰヲネス	ゐをねす
九六	一	ユメ	夢
九六	一	ミエシ	みえし
九六	三	ユメノ事	ゆめの事
九六	四	心地	心地
九六	五	ミテ	みて
九六	六	コノセウトモ	このせうとも
九六	六	ミテ	をしみて
九六	六	人〳〵	人〳〵
九六	六～七	ハルノ事	はるの事
九六	七	ケム	けん
九六	七	モノ	物
九六	八	ナム	なん
九六	九	ネガイケル	ねがひける
九六	一〇	クハス	くはす
九六	一〇	タイカク	たいかく
九六	一二	タヽウカミ	たゝうかみ
九六	一二	入テ	入て

九五	一〇	イリハ入タリケレト	はい、り／＼たりけれと
九五	一一～一二	ムカヒニケレハ	むかひゐたりけれは
九五	一三	思ナケキテ	おもひなけきて
九五	一三	イカニセン	いかにせん
九五	一四	物ゆへ	ものゆへ
九五	一四	ユメ	夢
九五	一四	ミテ	見て
九五	一四	アカヌ	さめてあかぬ
九五	一五	コロ	こゝろ
九五	一六	返シ	かへし
九六	一	ヰヲネス	いをねす
九六	一	ユメ	夢
九六	一	ミエシ	見えし
九六	三	ユメノ事	夢のこと
九六	四	心地	こゝ地
九六	五	ミテ	見て
九六	六	コノセウトモ	人／＼いふこのせうとも
九六	六	ミテ	みて
九六	六	人〳〵	（なし）
九六	六～七	ハルノ事	春の事
九六	七	ケム	けん
九六	七	モノ	もの
九六	八	ナム	なむ
九六	九	ネガイケル	ねがひける
九六	一〇	クハス	くはせ
九六	一〇	タイカク	大かく
九六	一二	タヽウカミ	たゝみかみ
九六	一二	入テ	いれて

九六	一三	花タチハナ	花橘
九七	一五	ナム	なん
九七	二	ワタリ	わたり
九七	二	花	花
九七	四	キヽタマヒ	きゝたまひ
九七	五	物モ	物も
九七	五	給テ	給て
九七	七	イキテ	いきて
九七	一〇	カシコキ物	かしこき物
九七	一〇	オサナキ物	おさなき物
九七	一一	アラムナヲ	あらんなを
九七	一二	ノタマヘ	の給へ
九七	一三	思フ	思ふ
九七	一五	タイカク	たいかく
九七	一五	イエ	家
九八	一	入ソ	入そ
九八	一	オイケレハ	おいけれは
九八	四	アナノ	あなの
九八	七	思ヘトモ	思へとも
九八	七	ワカウテ	わかうて
九八	八	ネタリタヘキ人	ねたりたへき人
九八	九	エセテ	ゑせて
九八	一〇	程	程
九八	一二	世中	世中
九八	一三	ヲタマキ	をたまき
九八	一四	返シ	かへし
九八	一五	ケフリ	けふり
九八	一六	身ヲ	身を
九八	一六	ウキクモ	うき雲
九九	一	ヨアケ	よあけ

九六	一三	花タチハナ	花たちはな
九七	一五	ナム	なん
九七	二	ワタリ	にたり
九七	二	花	はな
九七	四	キヽタマヒ	きゝ給
九七	五	物モ	ものも
九七	五	給テ	たまひて
九七	七	イキテ	ゆきて
九七	一〇	カシコキ物	かしこきもの
九七	一〇	オサナキ物	おさなきもの
九七	一一	アラムナヲ	あらむなを
九七	一二	ノタマヘ	の給へ
九七	一三	思フ	おもふ
九七	一五	タイカク	大学
九七	一五	イエ	いゑ
九八	一	入ソ	いれそ
九八	一	オイケレハ	をいけれは
九八	四	アナノ	あな
九八	七	思ヘトモ	おもへと
九八	七	ワカウテ	わかくて
九八	八	ネタリタヘキ人	いたりたへき人
九八	九	エセテ	えせて
九八	一〇	程	ほと
九八	一二	世中	世中
九八	一三	ヲタマキ	おたまき
九八	一四	返シ	かへし
九八	一五	ケフリ	煙
九八	一六	身ヲ	身を
九八	一六	ウキクモ	うき雲
九九	一	ヨアケ	夜あけ

九九	二	帰リテ	帰りて	かへりて	かへりて
九九	二	ヲンナ	をんな	女	女
九九	三	クヒツヘキヤウニ	くひつへきやうに	くひつきやに	くひつきやに
九九	三	物ヲ返テ	物を返て	ものをてかへて	ものをてかへて
九九	三	イカン	いかん	ゆかん	ゆかん
九九	四	心マトヒシテ	心まとひして	こ、ろまとひて	こ、ろまとひて
九九	四～五	エフミタテス	えふみたてす	えふみたてす	えふみたてす
九九	五	物オホエ	ものおほへ	ものおほえ	ものおほえ
九九	五	ムツマシウ	むつましう	むつましく	むつましく
九九	七	心地	心地	心ち	心ち
九九	七	アシウテ	あしうて	あしくて	あしくて
九九	七	エマイリコヌス	えまいりこぬす	えまいりこぬす	えまいりこぬす
九九	八	タマヘ	たまへ	給へ	給へ
九九	八	マイラム	まいらん	まいらむ	まいらん
九九	一一	タカ	誰	たか	たか
九九	一一	イノチ	命	イノチ	イノチ
九九	一二	オシミ	おしめ	おしみ	おしみ
九九	一三	入ス	入す	いれす	いれす
九九	一三	返テ	返て	かへりて	かへりて
九九	一三	カクナン	かくなん	かくなむ	かくなむ
九九	一四	カシカウ	かしかう	かしこく	かしこく
九九	一四	行テ	行て	いきて	いきて
九九	一四	ミレハ	みれは	見れは	見れは
九九	一五	物モ	物も	ものも	ものも
九九	一五	物ヲオモヒケレハ	物をおもひけれは	ものおもひけれ	ものおもひけれは
九九	一六	クチオシウ	くちおしう	くちおしく	くちおしく
一〇〇	一	キエハテ、	消はて、	きえはて、	きえはて、
一〇〇	一	ハルカ	はるか	はは	はは
一〇〇	二	ユメ	ゆめ	夢	夢

一〇〇	二	タマヽテ（ヰか）君ニ	タマして（「、」踊虫損か）君に	タマシヰ	タマシヰ
一〇〇	三	返シ	返し	返し	返し
一〇〇	四	タマシヰ	玉しゐ	玉しゐ	玉しゐ
一〇〇	五	セム	せん	せん	せん
一〇〇	六	事	事	事	事
一〇〇	六	ナケト	なけとも	なけと	なけと
一〇〇	八～九	タヱイル	たえいる	たへいる	たえいる
一〇〇	九	ミテ	みて	みて	見て
一〇〇	九	マトヒイテ、	まとひいて、	まとゐて、	まとゐて
一〇〇	一〇	イヱ	家	いゑ	いゑ
一〇〇	一一	イテヰて	いてゐて	ゐていて	ゐて
一〇〇	一二	ナキヨヘト	なきよへと	なきまとへと	なきまとへと
一〇〇	一三	ヨサリ	よさり	ようさり	ようさり
一〇〇	一三	火ヲ	火を	ひを	ひを
一〇〇	一四～一五	火ヲ	火を	ひを	ひを
一〇〇	一五	ミレハ	みれは	見れは	見れは
一〇〇	一五	心地	心地	心ち	心地
一〇〇	一七	事	事	こと	こと
一〇一	一	イフコトモ	いふことも	いふとも	いふとも
一〇一	一	ソレナレハ	それなれは	それなりけれは	それなりけれは
一〇一	四	入テ	入て	いれて	いれて
一〇一	四	我身（「事」の右に別の草書体で「身」とあり）	我身	わかみ	わか身
一〇一	五	フサマホシキ事	ふさまほしき事	しすふさまほしきこと	しすふさまほしきこと
一〇一	六	ナミタ	涙	涙	涙
一〇一	六	ウヘニ	上に	うゑに	うゑに
一〇一	七	アハヌウカヘル本	あはぬうかへる本	あはの山かへる本ま、	あはの山かへる本ま、
一〇一	八	返シ	返し	かへし	かへし

一〇一	一〇	ツヰニ	つゐに	ついに	ついに
一〇一	一一	ナム	なん	なん	なん
一〇一	一一	程ニ	ほとに	程に	程に
一〇一	一一	夜	夜	夜の	夜の
一〇一	一一	ナク	なく	なし	なし
一〇一	一二	ヰニケレハ	ゐにけれは	いにけれは	いにけれは
一〇一	一三～一四	ステテ行ニ	すて、行に	すててゆき	すててゆき
一〇一	一四	セウトスン サ	せうとすん さ	た、このせ うとすさ	た、このせ うとすさ
一〇一	一六	オヤ	や	や	や
一〇一	一一	ハラヒ（「ヒ」ミセケチで右に「ハ」）テ	はらいて	はらひて	はらひて
一〇一	一七	イタレハ	いたれは	ゐたれは	ゐたれは
一〇二	一	タマシヰ	たましゐ	たましゐな ん	たましゐな ん
一〇二	二	三七日	三七日	三七日は	三七日は
一〇二	三	七日時／＼	七日時／＼	四七日はと き	四七日はと き
一〇二	三～四	ナミタ	なみた	涙	涙
一〇二	四	ナミタ	涙	涙	涙
一〇二	五	水	水	みつ	みつ
一〇二	五	法花経	法花経	法華経	法華経
一〇二	五	ヒエノ	ひへの	ひえの三昧 堂にて	ひゑの三昧 堂にて
一〇二	六	ホノメク事	ほのめく事	ほのめくこ と	ほのめくこ と
一〇二	七～八	ユメニモタ シカニハ	夢にもたし かには	ゆめにもた しかに	ゆめにもた しかに
一〇二	九	ナム	なん	なん	なん
一〇二	一〇	ヒトリナム	ひとりなむ	ひとりなん	ひとりなん
一〇二	一一	女	女	むすめ	むすめ
一〇二	一二～一三	タマウト	たまふと	給と	給と
一〇二	一三	クルマ	車	車	車

一〇二	一三	トホリタマ フコトニ	とほりたま ふことに	とりたまふ と	とりたまふ と
一〇二	一四	フルマヒテ タテマツレ 侍ニ	ふるまひて たてまつれ 侍に	ふるまいて たてまつれ たふに	ふるまいて たてまつれ たふに
一〇二	一五	ミタマヒ	みたまひ	見たまひ	見たまひ
一〇二	一五～一	イ（「イ」虫損）マイヱ	あま家	今家	今家
一〇二	一五	ウケタマハ リヌ	うけたまは りぬ	うけ給はり ぬ	うけ給はり ぬ
一〇二	二	タイカク	たいかく	大学	大学
一〇二	二	入ニ	入に	いりに	いりに
一〇二	二	殿	殿	との	との
一〇二	二	カヘリ給テ	かへり給て	かへりて	かへりて
一〇二	三	御女	御女	御むすめ	御むすめ
一〇二	四	ナム	なん	なん	なん
一〇二	四	キコヱ	きこえ	きこえ	きこえ
一〇二	四	エシテ	えして	ゑして	ゑして
一〇二	五	入給	入給	いり給	いり給
一〇二	五	中ノ君	中の君	中君	中君
一〇二	五	オナシ事	おなし事	おなしこと	おなしこと
一〇二	六	タマフ	給	たまふ	たまふ
一〇二	六	三ノ君	三の君	三君	三君
一〇二	六	給	給	たまふ	たまふ
一〇二	八	シムテム	しんてむ	しむ殿	しむ殿
一〇二	九	ヨキヒ	よきひ	よき日	よき日
一〇二	九	ヨヒタマフ	よひたまふ	よひ給	よひ給
一〇二	九	御セウソコ	御せうそこ	御せうそく	御せうそく
一〇二	一〇～一一	キヌノ	きぬの	（なし）	（なし）
一〇二	一一～一二	キテ、リヰ タルクツ	きて、りゐ たるくつ	きてしりゐ たるくつ	きてしりゐ たるくつ
一〇三	一二	フミノナク トリテ	ふみのなく とりて	文のち、（本ま、）とりて	文のち、（本ま、）とりて
一〇三	一三	タウノ	たうの	ちやう	ちやう
一〇三	一四	フミマキ	ふみまき	文まき	文まき

一〇三	一四	タマヘレハ	たまへれは	たてまつれは	たてまつれは
一〇三	一四	トリタマハネハ	とりたまはねは	とり給はねは	とり給はねは
一〇三	一六	ヲヒ	をひ	おひ	おひ
一〇三	一六	ヒキトメタマヘハ	ひきとめたまへは	ひきとめ給へは	ひきとめ給へは
一〇三	一六～一七	トマリ給ニ	とまり給に	とまりたまひに	とまりたまひに
一〇三	一七	ミテ	みて	見て	見て
一〇四	一	ミ給テ	み給て	みたまひて	みたまひて
一〇四	一	カシコウシツ、	かしこうしつ、	かしこくしつと	かしこくしつと
一〇四	二	イテ、	出て	いて、	いて、
一〇四	四	ヨロコヒ給ニ（「一日」に続く）	よろこひ給に	よろこひたまふに	よろこひたまふに
一〇四	四	一日（三日？）	一日	三日	三日
一〇四	五	イカメシウシテ	いかめしうして	いかめしうて	いかめしうて
一〇四	五	マチタマフ	まちたまふ	まち給	まち給
一〇四	六	クシタマヒケル	くしたまひける	くし給ける	くし給ける
一〇四	七	イモフト	いもふと	いもうと	いもうと
一〇四	七～八	アルヤニキタリ	あるやにきたり	ありしやにいきたり	ありしやにいきたり
一〇四	一〇	ミシ	みし	見し	見し
一〇四	一一	物ワスレ	物わすれ	ものわすれ	ものわすれ
一〇四	一一	オモヒシ物	おもひし物	おもひしもの	おもひしもの
一〇四	一二	殿	殿	との	との
一〇四	一二	イカテソ	いかてそ	いかにてそ	いかにてそ
一〇四	一三	大殿	大殿	大臣殿	大臣殿
一〇四	一四	オホシケリ	おほしけり	おほしたりけり	おほしたりけり
一〇四	一四	ハカリ	許	はかり	はかり

一〇四	一五	ミエタマハサリケル	みえたまはさりける	みえ給さりける	みえ給さりける
一〇四	一五	ノ給ヘハ	の給へは	の給へは	の給へは
一〇四	一七	事	事	こと	こと
一〇五	一	アハレノ事ヤ	あはれの事や	あはれのことや	あはれのことや
一〇五	一	我カ	我か	わか	わか
一〇五	三	心	心	こゝろ	こゝろ
一〇五	三	物シ侍ケレハ	物し侍けれは	ものし給けれは	ものし給けれは
一〇五	四	エワスレカタク	ゑわすれかたく	えわすれかたく	えわすれかたく
一〇五	四	シタマフラメ	したもふらめ	し給らめ	し給らめ
一〇五	五	ミ侍ケンニ	み侍けんに	見たまひけんに	見たまひけんに
一〇五	六	ノチノ世	のちの世	後世	後世
一〇五	六	ム	ん	ん	ん
一〇五	七	タマシヰ	玉しゐ	たましゐ	たましゐ
一〇五	八	心	心	こゝろ	こゝろ
一〇五	八	ミセ侍ラム	みせ侍らん	みせたまふらん	みせたまふらん
一〇五	一〇	カクテハ、テハ	かくてはは、ては	かくては、ては	かくては、ては
一〇五	一二	ミルヘク	みるへく	みるへく	見るへく
一〇五	一二	心ミニサヤ	心みにさや	こゝろみにさへ	こゝろみにさへ
一〇五	一二	ナリタマハヌ	なりたまはぬ	なり給はぬ	なり給はぬ
一〇五	一三	ヲノカタマ／＼ナリヌトモ	をのかたま／＼成ぬとも	をのかさま／＼なりぬとも	をのかさま／＼なりぬとも
一〇五	一四	オモフ	おもふ	思	おもふ
一〇五	一六	サフラハセ給	さふらはせ給	さふらはせたまふ	さふらはせたまふ
一〇六	二	ネムコロニ	ねんころに	ねんころに	ねんころに
一〇六	二	ミエテ	みえて	あはて	あえて

一〇六	二	ヨカレ	よかれ	夜かれ	夜かれ	
一〇六	三～四	サイサウ	さいさう	宰相	宰相	
一〇六	四～五	コレナムナニタツ	これなんなにたつ	これなん名にたつ	これなむ名にたつ	
一〇六	六	サラニモ	さらにも	さうにも	さうにも	
一〇六	六～七	ウタツクルコトモ	うたつくることも	山たつることも	山たつることも	
一〇六	七	エタリカホニ	えたり顔に	えたりかほに	えたりかほ	
一〇六	七	クニノ人	国の人	国人	国人	
一〇六	八	タヘスソアリケル	たえすそ有ける	たらすそありける	たらすそありける	
一〇六	八	コノコムコ（「コ」の右に別筆？で「ラ」か）ノ、コテ	このこむこ（ら）の、こて	このこんま（ら）うの、こて	このこんま（ら）うの、こて	
一〇六	一〇	二所	二所	ふたところ	ふたところ	
一〇六	一一	ミタマヒケル	みたまひける	見給ける	見給ける	
一〇六	一二	ナリイテケレハ	なりいてけれは	なりゐてけれは	なりゐてけれは	
一〇六	一二	三ノ君	三の君	三君	三君	
一〇六	一三	二ナク	二なく	ふたつなく	ふたつなく	
一〇六	一四	大カク	大かく	大学	大学	
一〇六	一四	シフ	しふ	せう	せう	
一〇六	一五	大臣	大臣	大し	大し	
一〇六	一五	アラン	あらむ	あらむ	あらん	
一〇六	一五～一六	心タカキ	心たかき	こ、ろかたち	こ、ろかたち	
一〇六	一六	サイヲトリタマフナルヘシ	さいをとりたまふなるへし	さいおとり給なるへし	さいおとり給なるへし	
一〇六	一六	マタ	また	又	又	
一〇六	一七	フミ	ふみ	文	文	
一〇六	一七～一	ヒト	ひと	人	人	

（三）表三　平林二〇〇七対校本本文部分（書陵部本）の誤植箇所（そのために承空本が正確に示されていない箇所）（徳田・安部作成）

（三―一）平林氏対校本本文部分（書陵部本）の誤植箇所（そのために承空本が正確に示されていない箇所）（傍線部は引用者、以下同じ）

①承空本P九一（五オ）一一（平林承空本P一二一上L四）書陵部本「も」脱落

平林氏　↓あとはかなくやなりにしはま千鳥

書陵部本↓あとはかもなくやなりにしはま千鳥

②承空本P九四（六ウ）二（平林承空本P一二三下L二）書陵部本「て」脱落

平林氏　↓しひもみたまへとおもはむといりに

書陵部本↓しひもみたまへとおもはむとていりに

③承空本P九四（六ウ）二（平林承空本P一二四上L二）（余剰空白がある）

平林氏　↓心・・をほかにやらはつらしな―といひ

書陵部本↓（空白なし）

平林二〇〇七では「な」と「と」の間に空白がある。これは、平林文雄・財団法人水府明徳会編二〇〇一の「三本並列対校本」でも同じでそれを受けている。しかし、書陵部本影印でも、また、承空本でも空白は見られない。

④承空本P一〇六（十二ウ）一六（平林承空本P一三四下L三）〈余剰空白がある〉

平林氏　↓とりたまふなるへし―またあらし

書陵部本↓（空白なし）

同じく「し」と「ま」の間に空白がある。これは上記の平林氏の「三本並列対校本」と同じであるが、書陵部本影印でも、また承空本でも、そのような空白は見られない。

◎（書陵部本のみの誤植箇所――平林2001の対校本では正しい）

承空本P八九（四オ）5（平林承空本P一一九下L3）書陵部本の2つ目の「を」衍字

平林翻刻・書陵部本　↓たれをかをといふほと
書陵部本　↓たれをかと□空白□いふほと
（平林翻刻・承空本↓「たれをかいふほと」とあるが、こちらも「たれをかと□空白□いふほと」と読める。表一参照）
◎（書陵部本のみの脱字箇所――平林1988、平林2007でも脱落）
書陵部本影印Ｐ９０下（十四ウ）２（平林三本並列対校本Ｐ１５８下２）
いひてなけとも　↑×いひてなけと　（平林1988、平林2007翻刻でも「も」が欠けている。）
書陵部本の「とも」は行末で2文字がやや詰まっているが、石原・根本・津本1977でも書陵部本「なけとも」、平野由紀子1988でも「なけとも」と解している。

（三―二）その他の関連した誤植箇所
補足として、以下の誤植を修正する。
平林文雄・財団法人水府明徳会編著の「三本並列対校本」の誤植
①書陵部本影印Ｐ七八（二オ）一〇（平林三本並列対校本Ｐ一四六上Ｌ一〇）「に」の衍字
おりたちぬへきこ、地のみにして
書陵部本影印では、「おりたちぬへきこ、地のみして」となっており、「に」は認めがたい。
②影考館本の甲本・乙本の部分の誤植
甲本影印Ｐ五八（一〇ウ）Ｌ四・乙本Ｐ二一（八ウ）Ｌ二　甲本・乙本の踊り字の誤植
（三本並列対校本Ｐ一五二上Ｌ九・平林承空本翻刻Ｐ一二二上Ｌ九）
平林氏↓おもふものやうにせうといてあひて
甲本・乙本↓おもふもの、やうにせうといてあひて
平林氏の三本並列対校本、及び、それを引き継いでいる承空本翻刻において、甲本・乙本の「の」の後は「の」ではなく踊り字「ゝ」が正しい。

（四）表四　承空本の平林氏翻刻との相違一覧（安部・徳田作成）

以下に、承空本の翻刻にあたり、平林二〇〇七と表一の安部翻刻との相違箇所を示す。
凡例：○（番号）承空本・頁・丁裏表・行――相違点↓　安部の翻刻
①承空本Ｐ八四（一ウ）一――平林翻刻「ウ」（「ウ」の上に「フ」となぞったと見るか＝かさね書き箇所）↓モシテフミノテウ　イフ物ヲ（ウの右傍下　部分に小文字で「本ニカク」と二文字分くらいである）
②承空本Ｐ八四（一ウ）四――「中」ではなく「ナカ」↓　ナカニユクヨシノ、カハ、アセナ、ナン
③承空本Ｐ八四（一ウ）九――「野」ではなく「ノ」↓　ヨシノ、カハ、ニコレトソオモフ
④承空本Ｐ八四（一ウ）九――「ゾ」ではなく「ソ」↓　ヨシノ、カハ、ニコレトソオモフ
⑤承空本Ｐ八四（一ウ）一二――「ム」ではなく「ン」↓　ス□ミ（虫損。「ミ」の三画目のみあり。）ナントコソタノミワタラメ
⑥承空本Ｐ八五（二オ）二――「ム」ではなく「ン」↓　身ノナランフチセモシラスイモセ川
⑦承空本Ｐ八五（二オ）二――「瀬」ではなく「セ」↓　身ノナランフチセモシラスイモセ川
⑧承空本Ｐ八五（二オ）六――「語」ではなく「カタリ」↓　モチコロ月イトアカキニ物カタリ
⑨承空本Ｐ八五（二オ）一五――「程」ではなく「ホト」↓　カクイフホトニ夜フケニケレハ人
⑩承空本Ｐ八六（二ウ）四――「ガ」ではなく「カ」↓　ヌシアヤシウタカムラカミエヌカナ
平林文雄・財団法人水府明徳会編著二〇〇一の「三本並列対校本」から「ガ」のまま踏襲されている。

⑪承空本P八九（四オ）五――「カ」でなく「カト」（「カ」のあと一文字、「ト」の二画目虫損が読める）→　カ[ト]（二画目虫損）　（次の「イ」までの間に五文字程度空白あり）イフホトニクレニケレハ

⑫承空本P八九（四オ）五――空白記述なし→　カ[ト]（二画目虫損。次の「イ」までの間に五文字程度空白あり）――イフホトニクレニケレハ

⑬承空本P九一（五オ）三――⑱「モ」脱落→　アトハカモナクヤナリニシハマチトリ

⑭承空本P九一（五オ）三――「ド」ではなく「ト」→　アトハカモナクヤナリニシハマチトリ

「チドリ」は、平林文雄・財団法人水府明徳会編著二〇〇一の「三本並列対校本」から踏襲されている誤植。

⑮承空本P一〇四（一一ウ）四――「給三日」ではなく「給ニ一日」→　コトナリトヨロコヒ給ニ一日ノ夜

⑯承空本P一〇六（十二ウ）八――「ムマ（ラ）ウノ、コ」ではなく「ムコ（ラ傍書）ノ、コ」（「ウ」は衍）→　ムコ（「コ」の右に別筆？で[ラ]か）ノ、コテ

平林氏が「マ」とした字は、承空本で一行前のP一〇六（十二ウ）七の「コノクニノ人ニハ」などからみても「コ」と読める。また、平林氏が「ウ」としたのは右行の影考館本の「う」を誤って写したか。

（五）表五　承空本傍書・見せ消ち・重ね書き・空白・虫損などの箇所（安部）

承空本の諸本との比較が必要な箇所は、『篁物語』（小野篁集）が短編で大きな相違もないことあって、「傍書・見せ消ち・重ね書き・空白・虫損など」における問題も検討する必要が生じている（久保木二〇〇二の「解題」参照）。そのような事情に鑑み、それらの一覧も提示しておくことにしたい。（詳細に見れば、本表以外にも指摘できるが略す。）

①承空本P八四（一ウ）一――重ね書き（「ウ」の上に「フ」となぞったか）→モシテフミノテウ　イフ物ヲ（ウの右傍下空白部分に小文字で「本ニカク」と二文字分くらいである）

②承空本P八四（一ウ）一二――虫損→ス[ミ]（虫損。「ミ」の三画目のみあり。）ナントコソタノミワタラメ

③承空本P八六（二ウ）一――ミセケチ→　ハサウシニト（「モ」ミセケチで右に「ト」）ミニモイラテウソ

④承空本P八七（三オ）七――虫損→　ネ□（虫損）[ツ]（二画目虫損）クリ返ケルサテコノ女願ア

⑤承空本P八八（三ウ）九――虫損→　ヘト[ア]（虫損）ヨリケレハイテイナ／／トイ

⑥承空本P八九（四オ）五――虫損→　カ[ト]（二画目虫損。次の「イ」までの間に五文字程度空白あり）

⑦承空本P八九（四オ）五――空白（平林翻刻記述なし）→　カ[ト]（二画目虫損。次の「イ」までの間に五文字程度空白あり）イフホトニクレニケレハ

⑧承空本P八九（四オ）一四――虫損→　又モオコセケレトコノセウト□（虫損）ソカシ

⑨承空本P九〇（四ウ）三――虫損→　ナムサシテタテマツルカノイ[シ]□（虫損）ミノ

⑩承空本P九一（五オ）一三――虫損→　シウモイリタルカナイカ[ニ]（虫損）イハマシト

⑪⑫⑬承空本P九一（五オ）一四――虫損→　オモフ時ノ大納[言]（虫損）ノ子ナリ□（虫損）リア□（虫損）

⑭承空本P九二（五ウ）三――虫損→　マタコレヲレイノワラハモテキタ[リ]（虫損。一画目なし）セウ

⑮承空本P九二（五ウ）一五――虫損→　シラスソ□チ（ソの次に一文字分の虫損あるか。踊り字のようにもみえる）イテユケトイヒケレハ

⑯承空本P九五（七オ）一――ミセケチ→　オモクアナ（「ル」ミセケチで右

に「ナ」）ヤトイヒケレハスコシ心
⑰承空本P九五（七オ）一一――虫損→　アフコトハカタカリケリツネニム
　カヒ□（虫損）
⑱承空本P九六（七ウ）二――虫損→　ナケク／／モア力（虫損。二画目な
　し）シハテシヲ
⑲承空本P九六（七ウ）一四――追記記述→　ミトリノキヌノカニ（右に「コ」）
　ソマサラメ（書陵部本では耳の「ニ」）
⑳承空本P九七（八オ）八――ミセケチ→　ケリコレヲチ、ヌシ（「ヤ」ミ
　セケチ右に「シ」）キ、タマヒテ
㉑承空本P九七（八オ）一三――ミセケチ→　オノカ身（「事」ミセケチで「身」）
　ヲ思フトテノ給ニト
㉒承空本P九七（八オ）一四――虫損→　テイヨ／／カキノ□（虫損）ナニ
　ツチヌリ
㉓承空本P九八（八ウ）二――虫損、または書き損じ→　リキテナキケリ□
　（虫損か書き損じか）イモウトノコモ
㉔承空本P九八（八ウ）六――ミセケチ→　物カタリシテナキオリテイテナ
　（「ヌ」をミセケチで「ナ」）
㉕承空本P九九（九オ）一二――ミセケチ→　ケヌヘキ身（「物」ミセケチ
　で「身」）ヲモオシミト、メ、
㉖㉗承空本P一〇〇（九ウ）一――追記記述→　キエハテ、身（「事」の右
　に別の草書体で「身」とあり）コ（「ミ」と「ソ」の間に「コ」あり）ソ
　ハルカニナリハテメ
㉘承空本P一〇〇（九ウ）四――追記記述→　タマシキハ身（「身」の右に
　別の草書体で「身」とあり）ヲモカスメスホノカニテ
㉙㉚承空本P一〇〇（九ウ）一七――㉙㉚虫損→　ノカナシキ事ヲイヒテナ
　□（「ク」の一画目か虫損か）□（虫損）ヱ
㉛承空本P一〇一（一〇オ）四――追記記述→　カキ入テ我身（「事」の右
　に別の草書体で「身」とあり）ノナランヤウモ
㉜㉝承空本P一〇一（一〇オ）一六――㉜追記記述なし、㉝ミセケチ記述→
　オヤ（「ヤ」と「イ」の間の右行間に「ヲ」あり）ヲイトヨクハラヒ（「ヒ」
　ミセケチで右に「ハ」）テハナカウタキ
㉞承空本P一〇二（一〇ウ）三――ミセケチ→　七日時／／ミエケ（「ス」
　ミセケチで「ケ」）リコノオトコナミ
㉟承空本P一〇二（一〇ウ）一五――虫損→　リテミタマヒウケタマハリヌ
　イ（虫損）マ
㊱承空本P一〇六（十二ウ）一二――ミセケチ→　イトヨクナリイ（「ハ」
　ミセケチで「イ」）テケレハコノ三ノ君
㊲承空本P一〇六（十二ウ）一七――追記記述なし→（一六行最後「～ア」）
　シ（「シ」の上に〻を入れ、その右行間に「ラ」追記）カシカヤウニオモ
　ヒテフミツクルヒ

（八）表六　承空本『篁物語』漢字表記索引」（徳田作成）

凡例――承空本「小野篁集」（『冷泉家時雨亭叢書　第五期　承空本私家集
　上（第五十二回配本第六十九巻）』朝日新聞社、二〇〇二）における漢
　字表記箇所を、各漢字ごとに、「漢字・用例数・頁・丁・裏表・行」に
　て示す（掲出は、便宜上原則的に、漢字表記事例の初出例の順による）。

人、五〇例――P八三（一オ）一、P八三（一オ）四、P八三（一オ）八、P
　八四（一ウ）一五、P八五（二オ）四、P八五（二オ）七、P八五（二オ）
　一四、P八五（二オ）一五、P八七（三オ）二、P八七（三オ）九、P
　八七（三オ）一〇、P八七（三オ）一〇、P八八（三ウ）三、P八八（三ウ）
　四、P八八（三ウ）一一、P八九（四オ）九、P八九（四オ）一三、P
　八九（四オ）一五、P九一（五オ）八、P九一（五オ）一二、P九二（五
　ウ）七、P九二（五ウ）一二、P九二（五ウ）一四、P九三（六オ）六、
　P九三（六オ）六、P九三（六オ）七、P九三（六オ）八、P九三（六オ）

一三、P九四（六ウ）一、P九四（六ウ）九、P九四（六ウ）一二、P九五（七オ）
六、P九六（七ウ）三、P九六（七ウ）六、P九七（八オ）九、P九八（八ウ）
八、P一〇一（一〇オ）一三、P一〇一（一〇オ）一四、P一〇一（一〇オ）
一五、P一〇二（一〇ウ）五、P一〇三（一一オ）三、P一〇四（一一ウ）
三、P一〇四（一一ウ）一〇、P一〇四（一一ウ）一六、P一〇五（十二
オ）二、P一〇五（十二オ）五、P一〇五（十二オ）七、P一〇六（十二
ウ）七、P一〇六（十二ウ）一一、P一〇六（十二ウ）一四、
女、一三例――P八三（一オ）二、P八四（一ウ）一三、P八六（二ウ）七、
P八七（三オ）七、P八八（三ウ）一三、P八九（四オ）四、P九三（六
オ）三、P九七（八オ）一〇、P九九（九オ）九、P一〇一（一〇オ）八、
P一〇一（一〇オ）一五、P一〇二（一〇ウ）一一、P一〇三（一一オ）三、
子（コ）、二例――P八三（一オ）五、P九一（五オ）一四、
木、一例――P八三（一オ）八、
丁、一例――P八三（一オ）八、
物、二五例――P八三（一オ）一一、P八四（一ウ）一、P八五（二オ）六、
P八五（二オ）一六、P八六（二ウ）九、P八六（二ウ）一〇、P八七
（三オ）一三、P九〇（四ウ）六、P九〇（四ウ）八、P九二（五ウ）九、
P九二（五ウ）九、P九二（五ウ）一一、P九五（七オ）一四、P九七
（八オ）五、P九七（八オ）一〇、P九七（八オ）一〇、P九八（八ウ）六、
P九九（九オ）三、P九九（九オ）五、P九九（九オ）一二、P九九（九
オ）一五、P九九（九オ）一五、P一〇四（一一ウ）一一、P一〇四（一一
ウ）一一、P一〇五（十二オ）三、
哥、一例――P八四（一ウ）三、
山、二例――P八四（一ウ）五、P八四（一ウ）八、
心、二八例――P八四（一ウ）六、P八四（一ウ）一五、P八六（二ウ）七、
P八六（二ウ）一二、P八六（二ウ）一三、P八九（四オ）九、P八九
（四オ）一〇、P九二（五ウ）六、P九三（六オ）七、P九三（六オ）
一四、P九四（六ウ）四、P九四（六ウ）六、P九四（六ウ）八、P
九四（六ウ）一一、P九四（六ウ）一二、P九四（六ウ）一五、P九五（七
オ）一、P九五（七オ）五、P九五（七オ）六、P九五（七オ）一二、
P九六（七ウ）四、P九九（九オ）四、P九九（九オ）七、P一〇〇（九
ウ）一五、P一〇五（十二オ）三、P一〇五（十二オ）八、P一〇五（十二
オ）一二、P一〇六（十二ウ）一五、
又、五例――P八四（一ウ）一〇、P八七（三オ）三、P八九（四オ）
一四、P九〇（四ウ）一五、P九二（五ウ）二、
身、七例――P八五（二オ）二、P九七（八オ）一三、P九八（八ウ）
一六、P九九（九オ）一二、P一〇〇（九ウ）一、P一〇〇（九ウ）四、
P一〇一（一〇オ）四、
川、一例――P八五（二オ）二、
程、四例――P八五（二オ）四、P八八（三ウ）一〇、P九八（八ウ）
一〇、P一〇一（一〇オ）一一、
月、三例――P八五（二オ）六、P八五（二オ）八、P八五（二オ）一三、
夜、七例――P八五（二オ）八、P八五（二オ）一五、P九二（五ウ）
一二、P九五（七オ）九、P九八（八ウ）一〇、P一〇一（一〇オ）
一一、P一〇四（一一ウ）四、
春、一例――P八五（二オ）一〇、
冬、一例――P八五（二オ）一〇、
返、一五例――P八五（二オ）一二、P八六（二ウ）一四、P八七（三オ）七、
P八九（四オ）一一、P九〇（四ウ）一五、P九二（五ウ）一〇、P
九二（五ウ）一〇、P九五（七オ）一六、P九六（七ウ）一五、P九八
（八ウ）一四、P九九（九オ）三、P九九（九オ）一三、P一〇〇（九ウ）
三、P一〇一（一〇オ）八、P一〇三（一一オ）一、
入、一二例――P八五（二オ）一六、P八六（二ウ）七、P九〇（四ウ）五、
P九一（五オ）六、P九五（七オ）八、P九五（七オ）一〇、P九六（七
ウ）一二、P九八（八ウ）一、P九九（九オ）一三、P一〇一（一〇オ）
四、P一〇三（一一オ）二、P一〇三（一一オ）五、
事、一八例――P八六（二ウ）八、P八九（四オ）四、P九〇（四ウ）

一二、P九二（五ウ）一、P九六（七ウ）三、P九六（七ウ）七、P九六（七ウ）一五、P九七（八オ）一三、P一〇〇（九ウ）一、一〇〇（九ウ）四、P一〇〇（九ウ）六、P一〇〇（九ウ）一七、P一〇一（一〇オ）四、P一〇一（一〇オ）五、P一〇二（一〇ウ）六、P一〇三（一一オ）五、P一〇四（一一ウ）一七、P一〇五（十二オ）一、

中、六例――P八六（二ウ）八、P八八（三ウ）一〇、P九五（七オ）一二、P九七（八オ）一五、P九八（八ウ）一二、P一〇三（一一オ）五、

君、一三例――P八六（二ウ）一二、P八七（三オ）五、P八七（三オ）一二、P九一（五オ）一〇、P九四（六ウ）一四、P九五（七オ）三、P一〇〇（九ウ）二、P一〇〇（九ウ）五、P一〇三（一一オ）三、P一〇三（一一オ）五、P一〇三（一一オ）六、P一〇三（一一オ）一五、P一〇六（十二ウ）一二、

願、一例――P八七（三オ）七、

二、五例――P八七（三オ）一〇、P八七（三オ）一〇、P九六（七ウ）一二、P一〇六（十二ウ）一〇、P一〇六（十二ウ）一三、

色、二例――P八七（三オ）一一、P八七（三オ）一四、

一、三例――P八八（三ウ）一、P一〇一（一〇オ）一五、P一〇四（一一ウ）四、

尺、一例――P八八（三ウ）一、

三、九例――P八八（三ウ）四、P九六（七ウ）一二、P九九（九オ）一四、P一〇一（一〇オ）一四、P一〇二（一〇ウ）二、P一〇二（一〇ウ）七、P一〇三（一一オ）三、P一〇三（一一オ）六、P一〇六（十二ウ）一二、

四、三例――P八八（三ウ）四、P九九（九オ）一四、P一〇一（一〇オ）一四、

兵、一例――P八八（三ウ）一一、

給、二一例――P八八（三ウ）八、P八八（三ウ）一四、P九〇（四ウ）一一、P九二（五ウ）一二、P九三（六オ）七、P九七（八オ）五、P九七（八オ）五、P九七（八オ）一三、P九八（八ウ）五、P一〇三（一一オ）一、P一〇三（一一オ）二、P一〇三（一一オ）四、P一〇三（一一オ）五、P一〇三（一一オ）六、P一〇三（一一オ）八、P一〇三（一一オ）一七、P一〇四（一一ウ）一、P一〇四（一一ウ）四、P一〇四（一一ウ）一五、P一〇五（十二オ）九、P一〇五（十二オ）一六、

衛、一例――P八八（三ウ）一一、

佐、一例――P八八（三ウ）一一、

廿、一例――P八八（三ウ）一二、

申、一例――P八九（四オ）一、

神、二例――P八九（四オ）九、P九〇（四ウ）二、

御、一八例――P九〇（四ウ）四、P九〇（四ウ）九、P九〇（四ウ）一五、P九二（五ウ）一〇、P九二（五ウ）一〇、P九二（五ウ）一二、P九二（五ウ）一四、P九三（六オ）七、P九三（六オ）八、P九三（六オ）一四、P九四（六ウ）一二、P九七（八オ）一、P一〇二（一一ウ）一三、P一〇三（一一オ）一、P一〇三（一一オ）三、P一〇三（一一オ）九、P一〇五（十二オ）一一、P一〇六（十二ウ）一一、

使、一例――P九〇（四ウ）八、

昨、三例――P九〇（四ウ）九、P九〇（四ウ）一五、P九一（五オ）八、

日、一一例――P九〇（四ウ）九、P九〇（四ウ）一五、P九一（五オ）八、P九九（九オ）一五、P一〇〇（九ウ）一二、P一〇二（一〇ウ）二、P一〇二（一〇ウ）三、P一〇二（一〇ウ）五、P一〇二（一〇ウ）五、P一〇四（一一ウ）四、P一〇四（一一ウ）一四、

時、三例――P九一（五オ）一四、P一〇二（一〇ウ）三、P一〇二（一〇ウ）一一、

右、一例――P一〇二（一〇ウ）一一、

大、六例――P九一（五オ）一四、P一〇二（一〇ウ）一一、P一〇三（一一オ）三、P一〇四（一一ウ）一三、P一〇六（十二ウ）一四、P一〇六（十二ウ）一五、

納、一例――P九一（五オ）一四、

言、一例――P九一（五オ）一四、

道、一例――P九二（五ウ）二、
思、五例――P九二（五ウ）九、P九三（六オ）四、P九五（七オ）一三、P九七（八オ）一三、P九八（八ウ）七、
世、三例――P九三（六オ）一二、P九八（八ウ）一二、P一〇五（十二オ）六、
所、四例――P九五（七オ）八、P九八（八ウ）三、P一〇一（一〇オ）一七、P一〇六（十二ウ）一〇、
地、三例――P九六（七ウ）四、P九九（九オ）七、P一〇〇（九ウ）一五、
花、三例――P九六（七ウ）一三、P九七（八オ）二、P一〇二（一〇ウ）五、
帰、一例――P九九（九オ）二、
行、二例――P九九（九オ）一四、P一〇一（一〇オ）一四、
火、三例――P一〇〇（九ウ）一三、P一〇〇（九ウ）一四、P一〇一（一〇オ）一七、
我、二例――P一〇一（一〇オ）四、P一〇五（十二オ）一、
本、一例――P一〇一（一〇オ）七、
七、五例――P一〇二（一〇ウ）二、P一〇二（一〇ウ）三、P一〇二（一〇ウ）五、P一〇二（一〇ウ）五、P一〇四（一一ウ）一四、
水、一例――P一〇二（一〇ウ）五、
法、一例――P一〇二（一〇ウ）五、
経、一例――P一〇二（一〇ウ）五、
年、一例――P一〇二（一〇ウ）七、
右、一例――P一〇二（一〇ウ）一一、
臣、二例――P一〇二（一〇ウ）一一、P一〇六（十二ウ）一五、
侍、四例――P一〇二（一〇ウ）一四、P一〇五（十二オ）三、P一〇五（十二オ）五、P一〇五（十二オ）八、
殿、三例――P一〇三（一一オ）二、P一〇四（一一ウ）一二、P一〇四（一一ウ）一三、

（七）表七　承空本『篁物語』漢字表記率（徳田作成）

語形	語形リスト	総用例数	承空本漢字表記例	漢字率
物	物七・薄物一・もの〈終助〉一・物覚え〈未〉二・物思ひ〈用〉一・物思ふ〈体〉一・物語一・物語し〈用〉二・物騒がしう〈用〉一・物しげに〈用〉一・物し〈用〉一・物妬み一・物の書一・ものゆゑ〈接助〉一・物忘れせ〈未〉一・物忘れする〈体〉一・ものを〈終助〉一例	二五	二五	一〇〇・〇
御	御有様一・御返り四・御消息一・御魂一・御徳一・御懐一・御文三・御妻一・御許一・御車一・御心一・人の御心一・御女一例	一八	一八	一〇〇・〇
返	返し七・おほん返り四・返り事一・返ける一・返て二例	一五	一五	一〇〇・〇
君	君〈名〉二・大君一・中の君一・三君二・君〈代〉七例	一三	一三	一〇〇・〇
中	中四・道中一・中の君一例	六	六	一〇〇・〇
七	七日三・三七日一・四七日一例	五	五	一〇〇・〇
所	所三・二所一例	四	四	一〇〇・〇
侍	侍に一・侍り一・み侍り一・侍る一例	四	四	一〇〇・〇
時	時二・時時一例	三	三	一〇〇・〇
山	妹背の山一・妹背山一例	二	二	一〇〇・〇
我	我〈代〉二例	二	二	一〇〇・〇
木丁	几帳一例	一	一	一〇〇・〇
冬	冬一例	一	一	一〇〇・〇
願	願ひ〈用〉一例	一	一	一〇〇・〇
尺	一尺一例	一	一	一〇〇・〇
兵	兵衛佐一例	一	一	一〇〇・〇
衛	兵衛佐一例	一	一	一〇〇・〇
佐	兵衛佐一例	一	一	一〇〇・〇

廿	廿一例	一	一	一〇〇・〇
申	申一例	一	一	一〇〇・〇
納	大納言一例	一	一	一〇〇・〇
法	法華経一例	一	一	一〇〇・〇
経	法華経一例	一	一	一〇〇・〇
右	右大臣一例	一	一	一〇〇・〇
日	日二・三日一・三四日一・三七日一・四七日一・昨日三・七日三例	一二	一一	九一・七
人	人四一（人の女一・昔人一・人の家一・人の御心一含）・国人一・人聞き一・世人一・一人四・人人一・二人三・三人一・三四人二例	五五	五〇	九〇・九
心	心二二（心解け〈用〉一・心惑ひ〈用〉一・心行き〈用〉一含む）・心憂し〈止〉一・心肝一・心遣ひし〈用〉一・み心一・人の御心一・心地三・心地し〈用〉一例	三一	二八	九〇・三
女	むすめ二（人の女一含）・み女一・をんな一二例	一五	一三	八六・七
ニ	二つ一・二つ三つ一・二所一・二人三例	六	五	八三・三
三	三君二・三昧堂一・二つ三つ一・三日一・三日四日一・三人一・三四人二・三年一・三七日一例	一一	九	八一・八
身	身九例	九	七	七七・八
事	事二〇・返り事一・何事一・僻事二例	二四	一八	七五・〇
月	月三・月夜一例	四	三	七五・〇
四	三四日一・三四人二・四七日一例	四	三	七五・〇
昨	昨日三・昨夜一例	四	三	七五・〇
地	心地三・心地し一例	四	三	七五・〇
殿	殿二・母大殿一・大臣殿	四	三	七五・〇

花	花一・花柑子一・花染め一・花橘二・法華（花）経一例	六	四	六六・七
色	色一・桜色一・色色一例	三	二	六六・七
臣	右大臣一・父大臣一・大臣殿一例	三	二	六六・七
入	入ら〈未〉一・入り〈用〉九・這い入り〈用〉二・絶え入る〈体〉一・取り入れ〈未〉一・取り入れ〈用〉二・入れ〈用〉二・かき入れ〈用〉一例	一九	一二	六三・二
又	又八例	八	五	六二・五
世	世四・世人一例	五	三	六〇・〇
火	火五例	五	三	六〇・〇
夜	夜五・夜去り一・夜離れ一・夜な夜な〈副〉一・夜深く〈用〉一・昨夜一・夜一・月夜一例	一二	七	五八・三
程	程八例	八	四	五〇・〇
一	一尺一・一首一・一人四例	六	三	五〇・〇
子	子三・破子一例	四	二	五〇・〇
神	神一・石神二・ただすの神一例	四	二	五〇・〇
哥	歌二例	二	一	五〇・〇
春	春二例	二	一	五〇・〇
水	水二例	二	一	五〇・〇
給	給へ〈命〉二・たまは〈補助未〉五・たまひ〈補助用〉一五・たまふ〈補助止〉一〇・たまふ〈補助体〉五・たまへ〈補助已〉二・たまへ〈補助命〉七	四六	二一	四五・七
大	大臣殿一・大人二・父大臣一・母大殿一・大君一・大王一・大学五・大学の主二・大臣一・大納言一例	一六	六	三七・五
川	河二例・妹背川一例	三	一	三三・三
帰	帰り〈用〉三・帰さ一例	四	一	二五・〇

使	使三・使ふ〈体〉一例	四	一	二五・〇
年	年三・三年一例	四	一	二五・〇
行	行か〈未〉一・行き〈用〉三・行け〈已〉一・行け〈命〉一・行き〈用〉一・行く〈体〉二・心行き〈用〉一・引きもてゆき〈用〉一・馴れ行き〈体〉一例	一二	二	一六・七
道	道四・道交ひ一・道中一例	六	一	一六・七
思	思はずなり〈止〉一・思ひ二・思ひいで〈未〉二・思ひ隈な一・思ひ知ら〈未〉一・思ひ嘆き〈用〉一・思ひ持たら〈未〉一・思ひ居り〈止〉一・思は〈未〉三・思ひ〈用〉六・もの思ひ〈用〉一・思ふ〈止〉四・思ふ〈体〉八・もの思ふ〈体〉一・思へ〈已〉一・思へ〈命〉一例	三五	五	一四・三
言	言は〈未〉三・言ひ〈用〉二五・言ふ〈止〉二・言ふ〈体〉八・言へ〈已〉二・言ひ知ら〈未〉一・大納言一例	四二	一	二・四

A comparative study of "Shoukuu-bon", a Kamakura era manuscript copy of the "Takamura-monogatari"

ABSTRACT

This paper will examine the historical relationship between the two manuscript copies — "Shoukuu-bon" and "Shoryoubu-bon" — of the "Takamura-monogatari". "Shoukuu-bon" is the name given to the handwritten copy by Shoukuu from the Kamakura era entitled "Onono-Takamura-shu". "Shoukuu-bon" is very similar to "Shoryoubu-bon", another copy of the "Takamura-monogatari". A comparative study between the two reveals that in addition to being the earlier copy, "Shoukuu-bon" resembles the original more closely. Therefore, it is necessary to examine the original script and to investigate the historical relationship among all four copies of the "Takamura-monogatari" — "Shoukuu-bon", "Shoryoubu-bon", "Shoukoukan-kou-hon", and "Shoukoukan-otsu-hon".

Keywords【Transliteration of "Onono-Takamura-shuu", Shoukuu-bon, reprint, a transcript in Kamakura era, a original script.】